

特殊研 B - 169

一般研究報告書

聴覚障害理解のための教材開発とそれを活用した授業

(平成12年度～平成14年度)

平成15年3月

独立行政法人国立特殊教育総合研究所
聴覚・言語障害教育研究部

序 文

平成5年に特殊教育の新たな教育の形態として施行された「通級による指導」は、その後の教職員配置改善計画の実施等により、全国に普及することとなった。いわゆる通級指導教室は、言語障害、難聴、弱視、情緒障害等の子どもたちに対する教育の場として、それぞれの地域の実情に応じて活用されてきたが、実際に指導を進めていく中で、そこでの指導と在籍学級における指導との相互の連携の必要性が重要視されるようになってきた。特に、聴覚障害の場合には、障害そのものの本人の受けとめ方、あるいはそれに対する周囲の友達や教師の理解の有り様が、難聴の子どもが学校生活を円滑に進めていく上での大切なキーポイントであると指摘されるようになった。

そこで、聴覚・言語障害教育研究部難聴教育研究室では、平成12年度より3年計画で、「聴覚障害理解のための教材開発とそれを活用した授業」をテーマとし、学校現場と協力しながら実践的な研究を進めてきた。

本研究では、聴覚障害をどのように受けとめるかということから議論を始め、難聴の子どもが通常の学級でどのような場面に遭遇し、そこでどのように対処しているのかについて、実際に難聴特殊学級や通級指導教室を担当している先生方から資料として提供していただき、学校生活における実態を把握することに努めた。その上で、聴覚障害の理解を促すための教材を開発したり、在籍学級に出向いて実際に指導を行うなどの試みを進めた。報告書には、こうした経緯の中でまとめられた具体的な実践例も盛り込むことができた。

小学校の教育課程には、新学習指導要領に基づき、「総合的な学習の時間」が設けられることとなった。通常の学級の子どもたちに対して、障害にかかわる授業を行うことも一つの活動例として広く実践されつつあることから、今回の研究は、小学校における今後の様々な実践の有り様を模索する上でのヒントを提供することにもつながると言えよう。

平成14年10月に公表された「今後の特別支援教育の在り方について(中間まとめ)」によれば、これからは通常の学級における様々な教育的ニーズのある児童生徒に対し、それぞれ必要な支援が行われるようになると推測される。こうした中では、障害の理解あるいは障害のある子どもとのかかわりについて、更なる実践的な研究が求められることになる。今回の研究がその礎になれば幸いである。

本研究を進めるに当たって、幅広い知見を紹介していただいたり、具体的な実践例を提供していただいたりした研究協力者の方々に厚くお礼を申し上げますとともに、各学校における更なる実践が難聴の子どもたちの豊かな学校生活の確立につながることを期待したい。

平成 15年 3月

聴覚・言語障害教育研究部長

宍戸 和成

目 次

1 . 研究の概要	1
2 . 研究経過	1
3 . 聴覚障害理解のための教材開発とそれを活用した授業 開発にあたっての検討項目 (中瀬浩一)	2
4 . 聴覚障害理解のための教材開発とそれを活用した授業 (大崎美保)	5
5 . 聴覚障害理解のための教材開発とそれを活用した授業 (田原佳子)	15
6 . 聴覚障害理解のための教材開発とそれを活用した授業 (宮内まり子)	25
7 . 障害理解のためのビデオ教材づくり (鷺尾純一)	36
8 . 障害を理解するとは？ (菅井邦明)	40
9 . まとめ (佐藤正幸)	42
資 料	44

研究の概要

本研究は、聴覚障害理解のための教材開発とそれを活用した授業の構築を行うことを目的とした。本研究の内容としては、まず聴覚障害理解に関する情報を整理し、教材開発のための基礎資料を収集し、教材の開発及び試作を行う。そこで開発及び試作された教材を活用して、聴覚障害理解の授業に関する試案を作成し、実際に授業を行なったことである。さらに、これらの授業について授業を受けた児童生徒からの感想をもとに評価を行った。

本研究は、主として通常の学校に在籍する聴覚障害のある児童生徒に対する理解に焦点をおき、聴覚障害のきこえの理解、補聴器の理解に留まらず、コミュニケーションの理解など広範囲にわたって教材開発及びそれを活用して授業の構築を行うところに特徴がある。

研究経過

本研究では、まず、聴覚障害理解のための教材開発を行うにあたっての検討項目を整理した。それに基づいて4人の研究協力者に教材開発及び授業実践を行ってもらった。それと同時に聴覚障害理解のための授業に関する調査を行った。調査報告は第8回アジア太平洋聴覚障害問題会議及び独立行政法人国立特殊教育総合研究所紀要第29巻で報告した。これらの報告は巻末に資料として掲載した。

さらに、大学生による聴覚障害理解のための教材開発、論考として「障害を理解するとは？」を掲載した。

*なお、研究協力者の1人である田嶋恵美子先生の実践報告については、平成14年3月に刊行されたプロジェクト研究報告書「通常学級において留意して指導することとなっている児童生徒に対する指導および支援体制の充実・整備等に関する研究」(平成11年度～平成13年度)に掲載されています。

田嶋恵美子・佐藤正幸：通常学級における聴覚障害の理解・啓発指導について
プロジェクト研究報告書「通常学級において留意して指導することとなっている児童生徒に対する指導および支援体制の充実・整備等に関する研究」(平成11年度～平成13年度)
独立行政法人国立特殊教育総合研究所,105-109.

聴覚障害理解のための教材開発とそれを活用した授業
開発にあたっての検討項目

大阪市立聾学校
中瀬 浩一

「聴覚障害理解のための授業やその教材」を考える際には、事前にいくつか考慮すべき点があると思われる。

(1) 「聴覚障害」の理解と「聴覚障害児」の理解

「きこえない」「きこえにくい」ということの意味を教えるための授業なのか、「きこえない(きこえにくい)子ども(あるいは人)」への理解を教えるための授業なのかどうかということである。目指すべきところはいずれかの二者択一ではなく両方の理解が必要となるわけであるが、「きこえない(きこえにくい)障害そのもの」を扱うことだけに終始しないようにする必要がある。

(2) 教師自身が「聴覚障害を理解」しているか？

授業を行う教師自身が「聴覚障害」を理解していることがまず求められよう。聴覚障害児者と出会ったことのない教師にとっては授業で子どもたちに理解を求めていくのは甚だ困難を極めるとと思われる。また、学級に聴覚障害児が在籍している場合、「特設の授業」よりも学級の聴覚障害児への日々の関わりが一番の「教材」となり得ることを知っておくべきであろう。

(3) 知識を通しての「聴覚障害理解」と体験を通しての「聴覚障害理解」

いずれの場合であっても、聴児にとって「実感」の伴うものになり得ることが求められると思われる。

上記をふまえて、「聴覚障害理解のための教材開発」にあたって、検討すべき項目を以下に述べる。

1. 授業者

聴覚障害理解の授業を実際に行うとき、次のような授業者の分類ができると思われる。

通常学級担任が担任する学級で実施

障害児学級担任(除く、難聴学級担任)が通常学級で実施

学校内の(固定制)難聴学級担任(あるいは、校内に設置された通級指導教室担当)が通常学級で実施

学校外の通級指導教室担当が通常学級で実施

(指導している聴覚障害児の在籍校での実施)

その他(聾学校教師が実施等)

それぞれ指導上の留意事項があると思われるが、具体的な事例は他章に譲ることとする。
なお、授業を行うという観点から上記に分けたが、体験談などを聞くということであれば、「その他」に含まれる内容が増えてこよう。

2. 聴覚障害児の有無

授業者の分類だけでなく、学級（学年・学校）内での聴覚障害児在籍の有無によって上記の～は各々さらに次のa～dに細分される。

-
- a. 学級に聴覚障害児が在籍
 - b. 同学年に聴覚障害児が在籍
 - c. 学校内に聴覚障害児が在籍
 - d. 聴覚障害児が非在籍
-

学級内に聴覚障害児が在籍していない場合、障害理解の授業の教材は一般論的な内容となりがちで、たとえば次のようなものがよくなされている。

- ・聴覚障害者の生活
- ・きこえない（きこえにくい）ことから生じる不便さ
- ・きこえない（きこえにくい）人を援助する機器
- ・きこえない（きこえにくい）人の社会的な立場や現状

具体的には、ビデオ教材や読み物教材の活用や地域の聴覚障害者を招いての講演などが考えられる。

学級内に聴覚障害児が在籍する場合は、上記の一般論的な内容とともにその子どもに即した内容を取り上げることが多い。その場合、「身近すぎることから生じる諸問題」があると思われるので、次のような点にも留意する必要がある。

- ・聴覚障害児への心理的な配慮
（「障害を持ちながらもがんばっている」という面が強調されるという恐れも考慮）
- ・教師が一般論として提示する聴覚障害者（児）と目の前の級友としての聴覚障害児との「ギャップ」から生じる影響
- ・在籍する聴覚障害児やその保護者との事前の共通理解

筆者は主に通常学級担任に対して行ったアンケートで、学級に聴覚障害児が在籍する場合と在籍しない場合では授業の取り扱いに違いが必要かどうかという質問を行った。

その結果、「必要」と回答した教師の理由は下記の4群に分けられた。

A群：在籍する聴覚障害児に与える心理的な影響を考慮すべきとする意見

B群：学級集団の形成上の理由

C群：在籍する聴覚障害児を「聴覚障害者全体の代表」として一般化しないように、という意見

D群：聴覚障害児の授業理解の観点からの意見

A群には「本人の気持ちに配慮が必要」「マイナス面が強調されない配慮が必要」、B群には「聴覚障害児が学級にいる場合は、それまでの生活経験をもとにした話し合いが可能」「その児童のクラス内での様子・受け入れられ方なども考慮した取り扱いをしていく」、C群には「聴覚障害は全てその生徒と同じだと思ってしまうように」、D群には「授業の内容が十分理解されているかどうか心配」といった意見があった。在籍する聴覚障害児自身の授業理解の程度も考慮しながら、保護者や聴覚障害児への心理的な影響や授業が与える「聴覚障害者像」について教師が十分考えて教材の選択・授業の組み立てを行うことが求められている。

2. 教材内容（提示の仕方）

子どもの発達段階や年齢によっても、教材や授業方法の工夫が迫られる。

教材としての具体例としては、

- ・絵本
- ・読み物教材
- ・ビデオ教材
- ・聴覚障害者の講演（体験談）
- ・保護者や手話通訳者などの講演（体験談）
- ・手話体験・学習（指文字・簡単な手話・手話歌、聴覚障害者の会話など）
- ・きこえにくさや不便さ・補聴器などの体験
- ・在籍する聴覚障害自身が訴えかける（体験を述べるなど）
- ・その他自作教材

などが考えられる。教材研究や事前の打ち合わせなどを十分に行う必要があるものが多い。

また、実施回数についての検討も必要になる。年1回だけの特設の実施のものか、数回にわたって連続で行うのか、随時行うものか等によっても、取り上げ方も異なる。さらに、学級単独での授業か、学年あるいは学校一斉の取り組みなのかによっても形式が変化してくる。説明中心の組み立てになるのか体験を中心とするものかでも子どもに与える効果は異なってくるであろう。

聴覚障害理解のための教材開発とそれを活用した授業

京都市立九条弘道小学校

大崎 美保

1. はじめに

聞こえにくさを考える時、難聴学級の子ども達と交流学級の子ども達との認識の違いはどのあたりにあるのでしょうか。それぞれの立場によってとらえ方や感じ方が違うのは当然でしょうが、相手の立場に立って考えることにより『自分とは違う聞こえ方』を理解し、その人をも理解できるのではないのでしょうか。

難聴学級の子ども達は聞こえにくいことで様々な不便はありますが、聴覚や補聴器、視覚、口話読み取り等の方法を駆使して、たくましく自分流に生活しています。

交流学級の子ども達は難聴学級の友達とのふれあいの中で、自然に『きこえ』について知り、あるいは目覚め、きこえだけではない「人と人とのつながり」を一緒に築きあげています。

難聴学級の担任として、正しい聴覚障害理解を推進していくことは、子ども達の本来もつ力を伸ばすとともに、豊かな人間性を育てていくことにつながると考えます。それは単に「きこえない、きこえにくい」立場と「きこえる」立場をつなぐだけではなく、誰もが自分を生かせるバリアフリ - の社会を広げていくことにもなります。

2. 小学校における聴覚障害理解のための条件として

子ども達にわかりやすい内容であること

難聴学級の子ども達のニーズに合った内容であること

周囲の大人にも周知できる内容であること

学習後、実際の生活に反映できるものであること

この教材の学習により、難聴学級の子ども達を取り巻く音環境がより快適になり得るものであること

があげられます。今回は身近な音いろいろを媒体として教材を作成し実施したものです。

3. 聴覚障害理解のための手立て

担任した学年は4年生2名です。聴力タイプも就学以前の教育形態も異なる2人ですが、「自分達のきこえを友達や先生にもっと知ってほしい」という思いは強くもっていました。交流学級の友達に「朝の会に来てもらおうと難聴学級の私達のことがもっとよくわかってもらえる」「いつも相手からのアプローチを待っているのではなく、自分達のことは自分達から働きかけなきゃ」と積極的に理解推進に取り組みました。

授業自体は教師主導という形をとりましたが、その中には子ども達の気持ちやアイデアを組み込みながら内容を決めた部分もあります。自分達のきこえの理解、認識から始まり、1組の交流学級の友達39人をも巻き込んだ《2組で朝の会》及び学級通信の配布、校内お話会での発表会、京都市美術展（育成学級、難聴学級、養護学校）合同作品展での作品によるアピール、手話スピーチ大会参加での意見アピール等、いろいろな方法で理解推進を進めていきました。ここではそのうちの《2組で朝の会》と《音ビデオ『音いっばいだけきこえにくいんだよ』》についてまとめました。

7月10日 《2組で朝の会》

難聴学級では、学年の教科と、よりわかりやすく人に伝えるための発音学習や、今よりもっと友達と仲良くなれるためのコミュニケーション手段等の学習などを、『自立活動』の時間に学習をしています。

難聴学級での2人の愉快的やりとりや、お茶目な様子や、超マジメ(?)なところ・・・などなど、1組の皆が知らない面がいっぱいあります。

難聴学級の教室のつくりや聞こえにくさを、正しく皆に伝えたい気持ちも含めて、毎日の朝の会を2組でやってみたいということになりました。

『自立活動』の授業で、目的や内容や進め方、そして2人の役割分担、1組の友達への説明などを、みっちり話し合い、7月6日からいよいよスタートしました。

司会は難聴学級の2人です。息がピッタリだったりすれ違ったりと、なかなかユニークな司会ぶりを発揮してくれています。1組では **なぜか** おとなしいのですが、2組では張り切って **仕切って** います。

先生は、その2人の張り切っている姿がとっても好きです。

では、2組の朝の会について、少し紹介をしておきます。

なぜ2組で朝の会をしようと思ったのか。

- ・ 自分達の2組の教室でやってみたかった。
- ・ 音が静かで、皆が話していることがよく聞き取れるから。
- ・ 私達が1組のお友達に「いってらっしゃい」と言いたかったから。
(先生はこの理由を聞いてナルホドと思ったとともに胸にグッときました。)

皆に、2組の朝の会でどんなことを伝えたいのか。

- ・ 難聴学級のことをもっと知ってほしい。 教室の様子
聞こえにくさについて
- ・ 私達のことをもっと知ってほしい。 明るいところ
よくしゃべるところ
おもしろい性格
- ・ 楽しい会を一緒にしたい。 1分間スピーチ
難聴学級クイズ

そして、1番の願いは、『もっと知り合って、もっと仲良しになりたいよ』です。

7月13日 《朝の会1週間》

2組の朝の会に1組の友達が来るようになって1週間がたちました。Rちゃんは9月にはアメリカに戻ってしまうのと、短い期間ということもあり、毎日参加してもらっています。一緒にいる時間が増えると、仲良しになれるのもはやいということもわかりました。(素敵なことですね)

アメリカにもきこえにくいお友達がいるんだよね。9月になったら九条弘道の仲間と同じようにしゃべってみてほしいなど、先生はチラッと思いました。

今日は朝の会での皆の感想などを紹介します。朝の会が終わったら、1組の友達に今まで知らなかった2人のことを書いてもらいました。

≡ 二感想力 - ド (私, ぼくのことので新発見したことを書いてください。)

7/6 『2人の明るさが司会の時に皆に伝わったようですね。』

- ・Nちゃんは、とってもやんちゃでした。今までに見たことないNちゃんでもよかったです。
- ・Nさんとはよく話しているけど、それよりもっとしゃべるとは思いませんでした。
- ・(司会の時)大きな声でした。
- ・朝の会のDちゃんは、とてもおもしろくて、いつもと少し違う雰囲気でした。「Dちゃんはおもしろかった - 」
- ・Dちゃんはおもしろい(愉快)ということがわかりました。
- ・1組の教室ではおとなしいけど、言うのがすごかった(はきはき)です。

7/7 『2人とも友達の前での司会は生き生きしています。』

- ・Nちゃんは、1分間スピ-チで、モコという犬と仲良しということがわかりました。
- ・Dちゃんはバスが来なくて、ちょっと遅れたので、今日はわかりません。
- ・Nちゃんがおもしろいことを言うのがわかった。
- ・Dちゃんはやさしいところがある。
- ・Nちゃんの1分間スピ-チのときよくわかりました。
- ・Dちゃんはバスで来ていて、今日のちこくは自分が悪くないと思った。

少し文章を変えてあるところがあります。理由は感想の意味がきちんと正しく伝えられるようにということです。意味そのものは変えないようにしました。

それにしても、皆、なかなか鋭い!!! 2人は2組ではすっごく元気で楽しいのですよ。でも、皆のことも2人はちゃんと見ていて、いいところをいっぱい見つけていますよ。先生は、お互いにとって素敵なことだなと思っています。

7/9 『心がお互いに「聞きたい」「知りたい」と思っているのです。』

- ・Nちゃんの発音は、とってもわかりやすかったよ。
- ・しっかり口をあけて話せていたよ。
- ・Nちゃん、めがねつけてよかったね。ピンクのめがねでかわいい博士になったね。
- ・だいぶ頑張って発音しているんだね。ぼくもDちゃんの話したいことがわかるようになった。
- ・Nちゃんは、メガネをつけてよく見えるようになってよかったね。
- ・Dちゃんはがんばって話してくれて、とてもうれしかった。

自分の言いたいことや思ったことを伝えるのは、自分が考えるよりも、うんとむずかしいかも知れません。

難聴学級の友達は、自分の発音、友達の表情を見て正しく伝わっているかを考えながら話しています。

1組の友達は、2人の口元や表情を見ながら、一生懸命聴き取ろうとしています。相手を大切に思って、しっかり聞こうという気持ちが、きっと一番大切なのでしょうね。
皆の目が輝いています・・・。

さて、第1問目のクイズの答えは？

『電池チェッカ - は何に使うのでしょうか？』

- ? 補聴器の電力(?)を調べるため。
- ? 補聴器がまだ使えるか使えないかを調べるため。
- ? 電池の燃料を調べるため。

乾電池の残量を調べるための正解です。単1, 単2, 単3も調べられるよ。

補聴器は、中にボタン式の電池を入れて使います。電池がなくなったら補聴器が聞こえなくなるので、いつも電池の有無のチェックをします。

7/10 『皆がなじんでいて自然な雰囲気朝の会です。』

- ・楽しかった。(この一言が短いけれど1番聞きたい言葉かもしれないよ・・・。)
- ・2人の聞こえ方で、聞きにくいというのがあるのですか？(はい、一人一人聞こえ方は違うのです。聞きやすい音、聞きにくい音があり、左右でも違うのですよ・・・)
- ・Nちゃんは、めがねをかけるとは知りませんでした。今度かけてくださいネ!
- ・いつもの朝の会より楽しかった。
- ・ちょっとしゃべるのがはやかった。けど、発音をがんばっていました。
- ・Nさんは、いきいきとして、とても元気だった。

友達のがんばりに気づいて、それを認められるのはとっても素敵ですね。耳の聞こえと発音って、とっても深い関係があります。舌の動かし方や息の強弱も発音に大きく関わってきます。2人は自分で意識しながら話しています。

いつもの朝の会より～たまに参加するから楽しいのかもよ。いつもの朝の会でも楽しさを見つけてね。

7/11 『この日は爆笑の日でした・・・。』

- ・発音がわかりやすかった。
- ・早口の時は、あまりわからなかった。(反対もそうだね。早口だと2組の友達は読み取れないことがあるヨ)
- ・Nさんはけっこうそそっかしかった。でも、絵や観察がうまいこともわかった。
- ・Dちゃんは1分間スピーチの時、サッカーのミニゲームの話があり、とても楽しかった。
- ・最後に、先生がNさんに「大ボケね」と言うと、Nさんが先生に「おでぶね」と言ったのがおもしろかった。
- ・Dちゃんの1分間スピーチで、Dちゃんがぎゃく点ゴルしたと聞いてびっくりした。

見た目は(ごめんネ、Nちゃん・・・)とおもしろいけど、本当はお茶目で活発なんだよ。先生は、そんなNちゃんと話したり、時には冗談を言い合ったりするの

が楽しくて仕方がないんです！

Dちゃんは、しゃべり出したらとまらない。特に、サッカー - についてはとっても詳しくて、Jリ - グのこともよく知っています。先生はサッカー - のことはあまり知らないの
で、いつもDちゃん先生に教えてもらっているんです。

7/19 『1学期の最後の2組での朝の会』

- ・ 1組では、あんまりしゃべったりしないのに、2組ではすごく元気でした。
- ・ 今日のDちゃんは、すごくおもしろかったです。特に、1分間スピー - チは、なんかいっぱいおもしろいことをしていました。楽しかった。
- ・ Nちゃんは、とてもよくしゃべって元気なことがわかりました。1分間スピー - チもとてもじょうずでした。
- ・ Dちゃんは、とてもおもしろいし、発音もよくわかりました。難聴学級のクイズもとても楽しかったです。
- ・ Nちゃんの1分間スピー - チがよかった。毎日2組に行きたいです。
- ・ Dちゃんは渋滞でバスが遅れたため、最後の朝の会是一緒にできなくて残念でした。

7月の2組での朝の会は『おしまい』です。1組と2組とお互いに友達のいろいろな面が見つけられ、そのことで“心の距離”もより近くなったと感じました。皆さん、どうもありがとうございました。そして、D君とNさん、司会やクイズの準備などががんばりましたね。また、2学期を楽しみに・・・。

1 学 期 を 終 え て (担任の感想)

4年生の1学期は、何だか風のように過ぎ去った感じがしています。学習も生活も「えっ、もう終わり？」と思っていたのは担任の私だけではなかったかも知れません。『2組で朝の会』は、いろいろな準備を経て、7月6日にスタートしました。「2人は緊張しないで司会をしてくれるかな。」「1組の友達に自分の思いを伝えられるかな。」という担任の不安は、どうやら嬉しい誤算(考えすぎ)だったようで、スム - ズに伸び伸びと朝の会を進めていってくれました。『子どもの力を信じること！』でした。

そして、嬉しかったのは1組の友達が、毎日2組の教室にそろっていて、2人のいろいろな面を見つけてくれたことです。もちろん2組の2人も・・・。私も1組、2組、両方の子ども達のまだ知らなかった面に触れ、ますます4年生の皆が好きになっていきました。

プラス面ばかりではありません。時間が長びいて、途中で切り上げなければならなかったりしたこともあり、これからの課題もまだあります。2学期もまた工夫をこらして交流を深めていきたいと思っています。

クイズの答

2 問目 『難聴学級の壁のボ - ドの穴は何のためでしょう？』

〔答〕教室の中で声や音が響いたり(反響したり)しないように、それらを吸収しやすいために穴があいています。

3 問目 『難聴学級にエアコンがあるのはどうして？』

〔答〕外の大きな音が入るので窓が開けられません。特に、トラックやセミの声、雨音、風の音などはうるさくて、勉強中の大切な先生の声が聞き取れないこともあるほどです。

さて、1学期から《2組で朝の会》を実施してきましたが、そこでの交流をさらに発展させ、「きこえにくさ」についての理解を深めるために、難聴学級理解推進『音いっぱいだけ聞こえにくいんだよ』という音ビデオを作成しました。

私達の身の回りには様々な音がありますが、難聴学級の友達にはどんなふうに聞こえているのでしょうか。また、自分達それぞれの聴覚や補聴器等を活用しながらどんなふうに音を聴きとっているのでしょうか。この教材がすべてでは決してありませんが、少しでも友達のきこえを正しく知り、友達のがんばりや思いに気づくことによって「きこえにくさ」の理解が進んでいくように考えました。

音ビデオ『音いっぱいだけ聞こえにくいんだよ』

内容	(学校の中の音) 人の声(運動場で遊ぶ様子) チャイム(休み時間の終了合図) 廊下を歩く足音 教室の戸の開閉音 水道の水の流れる音 ~説明~ 給食時のクラス音 ~説明~ (学校の外の音) 車が走る音(東寺道) ~説明~ 宣伝カ - の音声 トラックの警笛(後方からの音) ~説明~ (家庭の中の音) 米をとぐ音 野菜を切る音(玉ねぎ) 野菜を炒める音(玉ねぎ) ハンバ - グを焼く音 オ - プンレンジの電子音 炊飯器の合図音 テレビの天気予報 インタ - ホンの音 電話のベルと留守番電話の声
----	---

ビデオ視聴時は、初めは音のみで画面は隠しておき、皆に何の音であるのか考えてもらいます。何秒か聞いてから音場面も出し、何の音であったのかを確認します。

この理解推進授業は主として難聴学級担任が行います。普通学級の子も達と担任はもちろん、難聴学級の子も達も一緒に学習します。ただし、難聴学級の子も達は事前に授業の目当て及び内容について学習しておきます。自分達主体の授業ともいえるわけです。

本校には難聴学級が4学級(1, 2, 4, 5年)あります。しかし、3年生と6年生には難聴学級に在籍がないため、日常的な交流はなかなか難しいので、いろいろな行事や隣接学年としての交流を心がけています。今回の理解推進授業は同じ中学年である3年生と4年生でそれぞれ授業を行いました。授業後の感想を載せた学級通信を紹介しておきます。

12月15日 3年1組の友達と一緒に勉強したよ！ (抜粋)

毎日、私達のまわりには、いろいろな音があふれています。好きな音を聞いたり、聞きたくないと思えば、ある程度はカットしたりと、人間の耳は不思議にできています。でも、一人ずつ個性があるように、本校には耳が聞こえにくい友達があります。『難聴学級の友達は音をどんなふうに聞いているのかな』と知ること、友達のことがよくわかり、今よりもっと仲良くなれるのではないのでしょうか。

3年生には難聴学級がないので、ふだんの交流と一緒に勉強することは少ないけれど、スポ・ツ教室や運動会や行事などで一緒に活動することもあります。耳のこと(聞こえについて)は、案外知っているようで知らないこともいっぱいあります。難聴学級の友達も、先生たちも、耳のこと(聞こえ)について、皆にもっともっと知ってほしいし、聞こえるからとか、聞こえにくいとかじゃなく、同じ学校の仲間として人間関係を深めていけたらいいなと思っています。

3年生の感想文

「えっ、この音も聞こえなかったの!? だから補聴器をつけてはるんや!」

「目と目を合わせて話したらいいんや。」

「補聴器は音を大きくするけど、それだけじゃなくて口も顔も見えて伝え合うんだ!」

授業で先生が説明する前に3年生のみんなからいっぱい『つぶやき』が聞こえてきました。授業のあとの感想を何人が紹介(しょうかい)します。(少し変えた文もあります)

今日なんちょう学級の人の話を聞いて、ほちょうきはなんちょう学級のともだちには、ぜったいひつようなものだとわかりました。

なんちょう学級の人にはふつうの人のばいこうしていることがわかりました。これから、なんちょう学級の人の顔を見て話します。

いっしょに遊んだり、とちゅうまで帰ったりするともっと仲よくなれるとおもう。

ほちょうきは、なんちょう学級の友だちにとって、すごく大事だとよくわかった。でも、ともだちのほうが大変と言っていたのでとてもびっくりしました。

なんちょう学級の友だちに話す時は、目を見て口を大きく話さなきゃと思った。

今日はクイズでなんちょう学級のことをよくわかった。ほちょうきは、大事なことがわかった。

なんちょう学級の人たちは、聞くためには、大きくしゃべるだけでなく、口の形もちゃんとやらないといけないことがわかりました。

ほちょうきは、大事な音が聞こえないときがあるからこまるな - と思った。

車、トラックのけいてきが聞こえにくいことがわかった。うしろから来る自転車のベルが聞こえにくかったらたいへんだなあと思いました。

ほちょうきはめたらみんな聞こえると思ったのに、聞こえない(聞きとりにくい)こともあった。

ほちょうきをかけると大きく聞こえるけど、聞こえる人と同じようには聞こえないこと。ほちょうきは大切だけど、こわれやすくて、音が聞きとりにくいこともあるということを知った。

4年2組の友だちの感想...本当の水道の音は大きく聞こえるけどビデオではあまり聞こえなかった。3年の人たちは、時々しゃべりながら(クイズに答えながら)、いっしょけんめい見ていると思う。

先生から・・・3年生と4年生といっしょに勉強してよかったです。3年生の友だちは、とてもいっしょけんめい考えてくれました。家の人にもこの勉強のことをぜひお話しくださいね。ビデオ(きかい)の音はなんちょう学級の友だちには聞きにくい音なんですけど、見て考えていましたね。さすが4年生と思いました。そして、3年1組の担任の先生、いっしょの時間をもっていていただき、ありがとうございました。

12月20日 **4年1組の友達と一緒に勉強したよ!** (抜粋)

先生が話している時にわかりやすいように静かにしていればと思う。今度から注意しよう。

みんながうるさくすると、補聴器にみんな声が入って、その中の一つだけを聞こうとするのは大変。1組はしゃべる時、ちゃんと聞こえやすいようにしたらいいと思う。本当に補聴器は大事なな。

難聴学級の2人は、ぼくたちの口や表情を見てどんなことを言っているのかわかるのがすごいなあと思った。補聴器をつけていても聞こえにくい音があると聞いてびっくりした。

人の声が小さかったら聞こえにくいんだなと思ったし、人がわいわいしゃべっていたら誰が何を言っているのかわからないのがわかった。

後ろからだ補聴器をつけていてもトラックの警笛が聞こえにくい。ぼくは、後ろからだとちょっとだけしか聞こえにくくならないと思っていたけど、前からの聞こえとは全然違うとわかった。

難聴学級の友達と話す時は、顔の表情などをはっきりさせないとダメとつくづくわかった。

先生が話をしている時、みんなが静かにしていたら難聴学級の友達は聞こえるだろうけど、みんながうるさくしていたら難聴学級の友達は聞こえにくい。それから、補聴器は本当に大切だと思った。

2人の友達は、ぼくたちの口や表情を見ていてくれる。これから話しかける時は、わかりやすいようにしよう。補聴器は2人にとって大切だと思った。

水道の水が流れる「じょろじょろ」という音は少し聞こえにくいんだな。二人にとって補聴器は大切なんだ。

音って『小さく聞こえる・・・わかりにくい・・・聞こえにくい・・・時々聞こえる』などいろいろあるんだ。いらない時に大きな声を出すと、2人は必要なことが分からなくなる。

補聴器をはめていたらはっきりわかると思っていたんだけど、今回の勉強で補聴器をかけていても聞こえにくい音があることがわかった。

チャイムとか大きい音なのに、「あんまり聞こえない」時があるんだ。トラックのクラクションも後ろからだ聞こえにくいこともあるから不便だなあと思った。

難聴学級の友達は、ぼくたちよりちょっと聞こえないと思っていたけど、ぼくたちよりたいへんなんだなとわかった。

小さく聞こえる音があるんだ。DちゃんやNちゃんは料理の音やトラックの警笛が聞こえにくいことがわかった。

補聴器で友達の声が聞こえるんだ。でも、補聴器をかけても車の音がちょっと聞こえない時があると聞いてびっくりした。

先生から・・・今回はビデオ視聴の都合もあり、会議室で皆で勉強しました。ビデオを見るだけじゃなく、話を聞く時も静かに勉強できたように思います。一緒に本校に入学して4年目になりますね。毎日そばにいるのが当たり前で、特別に何かを変えてつき合うということはないですね。でも、お互いが自分達で気がつかないうちに大切にしていることがあります。それは**お互いの聞こえ**です。

交流学习の時、自然に目と目を合わせて話し合う姿、給食の時じょうだんを言って大笑いする姿、休み時間に一緒に歩いている姿などなど。

そんな時って**自分達が輝いているって知っていますか?**

勉強した時だけでなく、ふだんもお互いの心が寄り添えばとっても素敵だと思います。難聴学級の友達にだけわかりやすく話すんじゃなくて、どの友達にも・・・。

『一人はみんなのために、みんなは一人のために!』ですね。

5. 理解推進授業・学習指導計画 (資料 = 3年生, 4年生各学級における交流指導)

本校では, 校内における聴覚障害理解のために各学年で理解推進授業(交流指導)を行っています。理論のみに偏ることなく, 子ども達によりわかりやすい授業になるように, 身近な音を取り入れた教材ビデオを活用しました。

- (1) ねらい
- 3年1組・・日常生活の音環境の中でのいろいろな聞こえ方に気づき, 難聴学級の友達のがんばりや聞き取るための工夫を知る。
 - 4年1組・・難聴学級の友達の聞こえ方を理解し, よりよいコミュニケーションの仕方を考える。
 - 4年2組・・自分達の聞こえ方を相手に伝えたり, コミュニケーションを深めるための工夫を考える。

(2) 授業展開

学 習 活 動	指 導 の 視 点(ねらい)	留意点・準備物
<p>1. 本時の学習のねらいを知る。 『聞こえにくさについて知ろう』</p> <p>2. 日常生活のいろいろな音について考える。</p>	<p>自分の生活の中では, どんな音がするだろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人の声・車の音・足音・工事現場 ・テレビ・楽器・風・ラジオ・電話 ・ドアの開閉音・自転車のベルの音 <p><u>自分達は毎日いろいろな音に囲まれて生活していることに気づく。</u></p>	<p>フラッシュカード</p> <p>フラッシュカード 作業プリント</p>
<p>3. 難聴学級の友達はどんなふうに聞こえているのかを考える。</p>	<p>音のビデオを視聴する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校内の音 人の声, チャイム, 廊下を歩く, 水道の水, ドアの開閉, 給食時間 ・外の音 車が走る音, トラック警笛, 宣伝カ - の声 ・家の中の音 米とぎ, 野菜切り(玉ねぎ), ハンパ - グ炒め, オ - プンレンジ, 炊飯器, テレビ(天気予報), インタ - ホン, 電話の音や声 <p>補聴器を外した時は聞こえ方が違うことを知る。 <u>補聴器をつけた時でも視覚を活用しながらいろいろな音をとらえていることを知る。</u></p>	<p>音のビデオ <u>いくつかの音は最初音だけを聞く。</u></p> <p><u>難聴学級児童は前もってビデオを視聴して内容を把握しておく。</u></p> <p>フラッシュカード <u>聞こえにくい(聞こえない)ことをマイナスにとらえないように考えさせる。</u></p>
<p>4. 互いにわかり合うためにはどうすればよいかを考える。</p>	<p>どうしたらわかり合えるかな。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・顔を見て話す。 ・大きく, はっきり, ゆっくりめに話す。 	<p>作業プリント フラッシュカード</p>
<p>5. わかったことをまとめる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・相手を思いやる気持ちをもちあう。 	<p><u>互いに伝え合おう, 分かり合おうという気持ちが大切なことに気づかせる。</u></p>

6. 今後の課題

毎日の生活の中で、何気なく自分達の耳に入ってくる音が、難聴学級の友達にとっては、とても大切な聞きたい音であったり、必要不可欠な情報であったりすることに気づいた子ども達があります。今回の学習を通して、今まで以上に交流時のコミュニケーションの大切さを感じた子ども達もたくさんいたように思います。

自分達の身近にあふれる音をビデオを使って学習したことで、難聴学級の友達の聞こえを実感としてとらえられたのではないのでしょうか。

学年の中に難聴学級がないと日常的に接する機会も少ないですが、これを機会に互いに声をかけて交流が深まればよいと思います。

しかし、まだまだ、「聞こえにくくてたいへんだな」という気持ちが強くて、自分との関わりにまでつなげて考えられない子どももいます。「～が聞こえにくいことがわかった。」だけで終わるのではなく、その時に難聴学級の友達はどんなふうに音を取り入れているのか、どんな工夫をすればコミュニケーションが深まるのかを自分なりに考え、自分達それぞれにできることを実践しようとする力をつけていってほしいと思います。

難聴学級の子ども達から、すべての友達にむけて『聞こえにくさ』について発信していくことは難しいけれど、子ども自身の思いを大切にしながら、聴覚障害に対する正しい理解推進を充実させていくように、授業の組み立てや、教材の工夫を考えていきたいです。

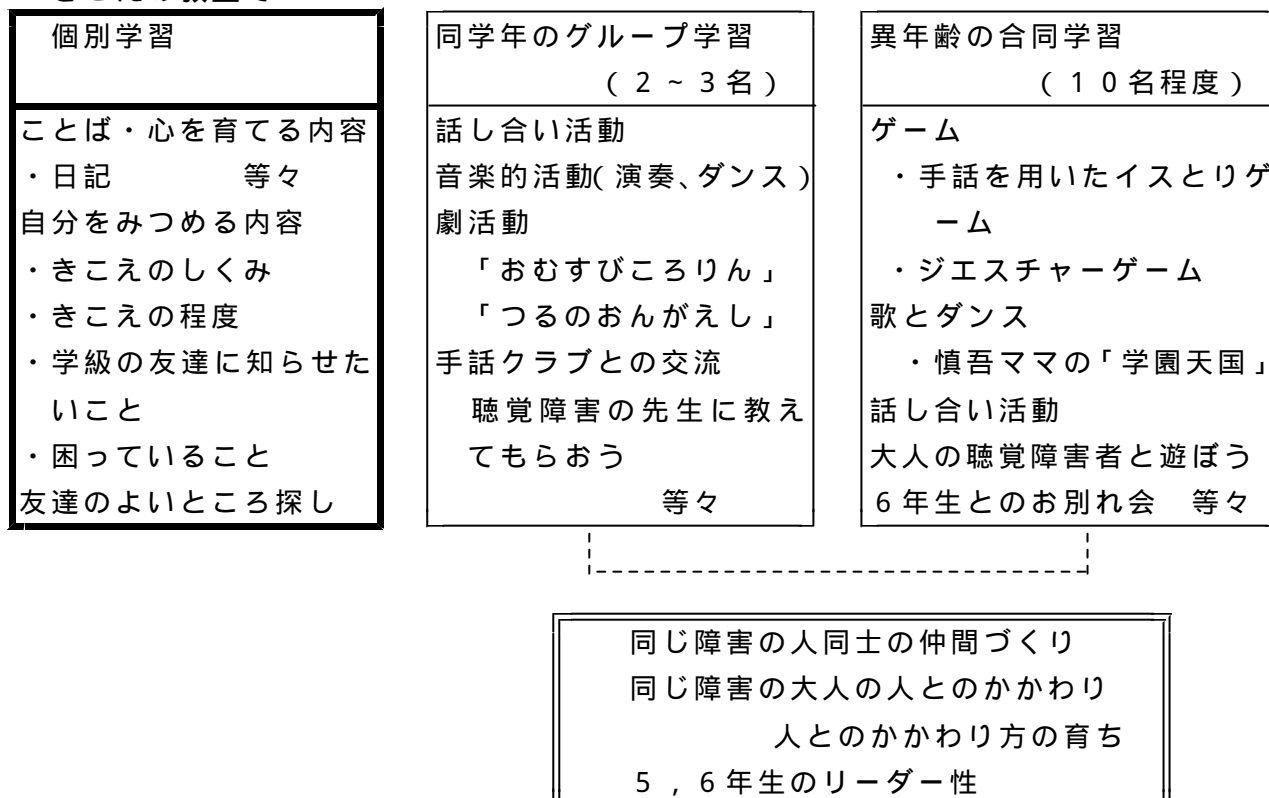
聴覚障害理解のための教材開発とそれを活用した授業

千葉市立院内小学校(現 筑波大学附属聾学校)

田原 佳子

きこえの教室の指導

きこえの教室で



通常学級、学年で 『難聴児自身からの発信による「難聴理解」授業』

『難聴児・健常児がともに創り出す「難聴理解」授業』

補聴器の先生(補聴器体験)

「ハートはなにいろ」の読み聞かせ

- ・声なしことばゲーム
- ・口の形が同じことばさがし
- ・集会の校長先生の話*

「耳の不自由な人についてしらべよう」(総合学習)

手話(総合学習との関連)

文字放送の呼びかけ(国語の作文教材、社会との関連)

ビデオレター(難聴児から、健常児から)

ジェスチャーゲーム

ロールプレイ

- ・休み時間の後ろからの呼びかけ*
- ・かんちがい「内緒話」*
- ・メロデーは苦手
- ・順番に言うのは苦手

健常児の質問に答えよう

難聴児からの訴え

- ・「私、寂しい！」*
- ・「私の耳は治らない！」

構成的グループエンカウンター

- ・よいところ探し「ハートぼかぼか大会」

学級・学年の健常児、担任、校長、教頭、教務主任、養護教諭の
難聴に対する理解の深まり
難聴児の友達関係の改善
難聴児の自信へのつながり

Hちゃんへの情報保障を考え始めたM校長先生

Hちゃん(4年生85dB)のK小学校に訪問し、校長室で校長先生に「難聴」についての説明をさせていただいた後、

「4時間目に時間をいただいてHちゃんのことをわかってもらうための授業をやらせていただきます。お時間があれば校長先生も観にいらして下さい。」と申し上げたところ、4校時が近づくと、始まる前からHちゃんの教室に入って来て下さいました。

この日は、難聴理解の絵本『ハートはなににいる』の読み聞かせを行いました。

・・・集会がありました。校長先生のお話がわかりません。ももちゃんは思わずうつむいてしまいました。・・・(『ハートはなににいる』より抜粋)

次の日、M校長からきこえの教室に電話がありました。「なんだろう？」と思いながら電話に出ると

「集会のときの私の話がわからないという話がとてもショックだった。今まで、聞こえているものと思っていた。私はどうすればいいか・・・」

というような内容のことをおっしゃられました。可能な範囲でキーワードになる言葉の視覚的な資料を使って話せば校長先生の話がわかりやすくなる、それは、聞こえる子どもたちにとってもわかりやすくなるということを伝えました。それとともに、FM補聴器の装用を嫌がるHちゃんに装用することを勧め続けました。

タイミング良く、きこえの教室に市が赤外線補聴システムを設置してくれ、Hちゃん達に使い始めました。赤外線補聴システムのマイクを通して、先生や友達の声がとても聞こえやすくなったHちゃんは、やっとFM補聴器を装用する気になりました。

K小学校でFM補聴器をつけ始めたHちゃん。M校長は、FM補聴器のことを知ったときからHちゃんに装用するように勧めて下さっていたので、とても喜んで下さいました。すぐに集会でFM補聴器のマイクを使って下さいました。使ってみたのはよかったのですが、M校長は「うーん」と考え込んでしまわれました。

校長の話はHちゃんによく聞こえるようになった。

次に保健の先生が風邪についてのお話しをするときは入れ替わるときにマイクを渡せばよいのだからそれもよくなった。

でも、司会の先生にすぐにマイクを渡すことは難しい。

M校長は考え込まれた結果、市の教育委員会にその旨を伝え、FM補聴器のマイクがたくさんあって話をする教師が全員マイクを持っていれば全ての話がHちゃんに伝わるので、市がFM補聴器のマイクの貸し出しをしてくれないかということ相談されました。

その直後、市から私のところに電話がありました。「FM補聴器のマイクが複数で使用した場合効果があるか」という問い合わせでした。私は、いくつかの補聴器を扱っている業者にその件を尋ねるとともに、周波数を同じにした2台のマイクで実験をしてみました。結果、残念ながら、複数のマイクを使うと周波数が同じでも雑音が入り、使用できないことがわかりました。しかし、このことで教育委員会の先生ともいろいろな話ができ、今まで個人持ちだったFM補聴器を市でストックしておき、貸し出しをして下さる方向に話が進みました。

M校長は実験の結果を聞いてとてもがっかりされましたが、M校長が先頭になり、担任とともに、Hちゃんに聞こえる子どもたちと同じように情報を保障してあげたいという思いで、この学校ではHちゃんへの取り組みが広がってきています。

「S君、S君！」うしろからは聞こえないよ

S君(1年生60dB)の生活するO小学校に訪問し、休み時間の様子を見ているときの出来事。

広い校庭でサッカーを数人の男子と一緒にしていたとき、友達が約3メートルうしろから、「Sくん、Sくん、Sく～ん・・・」と何度も呼んでいるが、聞こえないS君。たまたま何度目かの呼びかけで偶然振り向き、「なあに？」と返事ができた。

そのあとの「難聴理解授業」の中で、さっそくこの出来事を担任のY先生にお願いして私と2人で劇ふうで1年生の学級の子どもたちに示してみた。Y先生に補聴器をつけた子ども役を演じていただいた。

「Yちゃん」

「・・・」

「Yちゃん」

「・・・」

「Yちゃんたら！」

「・・・」

「もうYちゃんたら何度呼んでも返事をしてくれない。もうYちゃんと遊ばない！」
さあ、子どもたちの反応は大変なものだった。

「Ｙちゃんがかawaiiそう」「Ｋちゃんはすごーく意地悪」・・・
そこで、みんなだったらどうやって呼ぶか、Ｋちゃん役を子どもたちに演じてもらった。
Ｙちゃんの前まで行って「Ｙちゃん」そのとき口をはっきり開けて言うんだよと説明
うしろからＹちゃんの肩をとんとんと軽くたたいて「Ｙちゃん」
どちらもＹちゃんにちゃんとわかってお話しができた。

自分を見てみんながひそひそ話をしてしていると訴えるＮちゃん

きこえの教室に来ては、学級の友達が自分を見ながら笑ったり内緒話をしてしていると訴え
続けるＮちゃん(５年生９５dB)。そこで、Ｎちゃんと相談をして学級訪問をしたときに
そのことをロールプレイで演じて考えてもらうことにした。Ｎちゃんの案で、顔の絵の掲
示物をＮちゃんが作ることにした。

いよいよ、学級での「難聴理解授業の時間」。Ｎちゃんが作った顔の絵を黒板に貼りな
がら説明し、Ｎちゃんと私で役割演技を行った。

・・・
・・・

見ていた子どもたちは、「私も悪口を言われているようで、悲しいことがあった」等々の
感想が出てきた。

次に、３人の子どもたちで演じてもらい、２人の友達が自分を見てささやいたり笑った
りするとどんな気持ちになるか感じてもらった。２人の友達役の子どもたちは悪口を言っ
たわけではないし、その子のことを笑ったわけではないけれど、なんとなく見てしまった
ことで勘違いをさせてしまったことに気づいた。

その役割演技の後、聞こえにくいとそんなふうに悪口を言われているように感じてしま
うことをＮちゃんから訴えた。子どもたちは、

「そんなことは絶対言っていないよ！」

とＮちゃんにはっきりと伝えた。Ｎちゃんは勘違いだとわかって満面の笑みを浮かべた。

授業後、Ｎちゃんに手紙を書いてもらった。

・・・Ｎちゃん、ごめんね。Ｎちゃんの気持ちに気がつかないで。でも、絶対Ｎちゃん
のことは見て笑ったのではないよ。これからは一緒におしゃべりしようね。

自分の考え過ぎだったことがわかったＮちゃんは気持ちが晴れたようで、とても明るく
なり、きこえの教室で悩みを訴えることも減った。

「私、さびしいの」

児童会の副会長をしているＡちゃん(５年生９０dB)。集会の司会進行を大きな声では
っきりと言いながら頑張っている。Ａちゃんは副会長に立候補するほどの積極性がある
反面、友達とかかわることが苦手である。特に５年生の学級編成で仲良しの友達と学
級が別れてしまい、新しい学級で仲良しの友達がなかなかできなかった。きこえの教室に
来るたびに、

「きこえの教室は楽しい」「学級は友達がなくてさびしい」

と、訴えることが多くなってきた。

そんなとき、学級訪問してどんなことをしようかと投げかけたところ、Ａちゃんは

「さびしい、友達がほしい、みんなとおしゃべりがしたいということをみんなに伝えたい」という気持ちを持った。お母さんや担任の先生にもこのAちゃんの気持ちを伝え、友達の前で話すことを了解していただいた。

当日、私が学級の子どもたちにAちゃんからの真剣な話があることをまず伝え、子どもたちの聴こうとする気持ちを高め、Aちゃんが言いやすい雰囲気を作った。

いよいよ、Aちゃんがみんなの前で話し始めた。話し始めると教室中がシーンと静まりかえり、Aちゃんの声が響いた。

「私は休み時間ほとんど一人で過ごしています。でも、それは一人でいたいわけではありません。本当はひとりぼっちでさびしいんです。私もこれから話しかけるようにするので皆さんも私といっばいおしゃべりをして下さい。」

・・・パチパチパチ・・・

誰からともなく、拍手がわきあがった。その後の休み時間、Aちゃんの周りは友達でいっばいになった。給食も楽しくおしゃべりをしながら食べていた。

その直後のきこえの教室での学習で、Aちゃんの学級の子どもたち全員から一言ずつのメッセージをビデオで見せた。Aちゃんは大きな目を見開いて

「先生、これ、どうしたの？」

と、大きな声で尋ねた。

「驚いたでしょう。あの日、給食の準備中に隣の空き教室に一人ずつ来てもらってメッセージを一言ずつ言ってもらったのよ。それをビデオに撮ったの。」

Aちゃんは、目を輝かせて頬を紅潮させながら一人ひとりのメッセージを聴いた。

それから、Aちゃんは自分から友達を誘うようになり、Aちゃんの家で友達が遊びに来るようになった。誕生日会には9人の友達が来てくれたそうだ。日記にそのときのうれしくてたまらなかったことが記されていた。

きこえの教室「自分を見つめて」

1、題材の目標及び個別目標との関連

年間目標	(1)聞き手に伝わるように、はっきりと話することができる。 (2)自分の考えをもち、相手に伝えることができる。 (3)相手の気持ちを考えようとする。
学期目標 (2学期)	(1)- 聞き手を意識した声の大きさと話することができる。 (2)- 自分の訴えたいことを学級の友達や先生に伝えることができる。 (3)- 友達の気持ちを知り、それに応えることができる。
題材の目標	・学級の友達に聞こえるような声で話することができる。(1)- ・自分の思ったことを学級の友達や先生に話することができる。(2)- ・学級の友達の知りたいことに応えることができる。(3)-

2、主題に迫る手だて

- (1) ・本児の願いを大切にしながら個別目標を設定し、学級の友達や大勢の先生と係わる活動を多く取り入れる。
・難聴児が主人公の絵本を自分と比べながら読み、自分の障害と向かい合う。
・アンケートや手紙等により友達の思いを知り、相手の気持ちに応えていく。
- (2) ・通常学級の担任と連絡を密にとり、学級の友達の理解を得るために難聴理解授業を行う。できる限り本児（難聴児）自身から投げかけられるようにする。

3、学習計画（7時間）

学 習 活 動		時配
1	自分の「きこえ」について考えよう <ul style="list-style-type: none"> ◦ 難聴理解絵本『ハートはなにいろ』を読んで自分と似ているところ、違うところについて話し合う。 ◦ 学級の友達に知ってもらいたいことを考える。 	2
2	学級の友達に「きこえ」について知ってもらおう <ul style="list-style-type: none"> ◦ 学級の友達に聴覚障害についてどんなことを知りたいか、アンケートで調べる。(資料 参照) ◦ 自分の知ってもらいたいこと、友達の知りたいことをまとめる。 ◦ 学級の友達や先生にまとめたことを自分から発信して知ってもらう。(本児の通常学級での難聴理解授業) <ul style="list-style-type: none"> ・話し方、声のかけ方のプリントを読む。(資料 参照) ・聞こえにくさから生じる困ったことのロール・プレイングを行い、感じたことを話し合う。(資料 参照) ・本児が補聴器の先生となって、学級の友達に補聴器体験をしてもらう。(資料 参照) 	2
3	周りの人達に「きこえ」について知ってもらおう <ul style="list-style-type: none"> ◦ 学級の友達に自分から発信したときの気持ちについて話し合う。 ◦ 学級の友達からの手紙を読む。 ◦ 参観の先生方にも知ってもらいたいことを自分から発信する。 <ul style="list-style-type: none"> ・発音練習をした後、日記を読む。 ・本児が学級の友達に話しているビデオを見る。 ・学級の友達からのビデオレターを見る。 ・参観の先生方に補聴器体験をしてもらう。 ・担任の先生から本児の長所を聞く。 	2 本時 1/2
4	ふりかえって <ul style="list-style-type: none"> ◦ 学級の友達や先生方に手紙を書く。 	1

4、活動の様子

<省略します。>

5、成果と課題

本児自身が学級の友達からアンケートをとったことは、友達の気持ちに答えたいという意識を高めることができた。

学級の友達、担任や校長先生、そして本校の先生方の前で、話をする経験をしたことで相手に伝わるように話すことの大切さがわかり、はっきりと話そうと努力するようになった。

本題材を通して、本児は大きな自信を持ち、明るい表情で生活するようになった。

通常学級での難聴理解授業、担任のきこえの教室での授業参観等を通して、本児が生活する学校との連携がより深まった。

さらに、指導内容や指導方法をさまざまに工夫し、自分の気持ちを表現する力や相手の気持ちを思いやる心を育てていく必要がある。

通常学級での様子を、きこえの教室での学習内容にもっと効果的に生かしていきたい。

6、資料 きこえの教室「自分を見つめて」

資料 学級の友達の意識調査

難聴理解授業を行うには、難聴児の学級の友達が「難聴についてどの程度理解しているか」「どんなことを知りたいと思っているか」ということを知った上で、題材を考えることが大切である。そこで、自由記述式のアンケートをとって、学級の友達の意識を探った。アンケートの内容は、難聴児とともに考えた。そして、難聴児自身が友達に投げかける形で行った。

<アンケート結果> 主なもののみ、抜粋

*印は、難聴である本児が学級の友達に最も知ってもらいたいこととして選んだもの

質問	学級の友達の答え
1 耳が聞こえにくいことで知っていることは？	<ul style="list-style-type: none"> ・口形が同じだと聞き間違えてしまう（12名） ・口形を見て何と言っているかわかる（8名） ・手話で話す（8名） ・ゆっくりと話さないといけない（5名） ・はっきりと大きな声で話さないといけない（5名） ・補聴器を使っている（3名） ・大勢の人が話していると大事なことを聞き逃してしまう（1名） ・聾学校などに行って人の話を聞き取る努力をしている（1名） ・聴導犬と一緒に暮らしている人がいる（1名）
2 補聴器のことで知っていることは？	<ul style="list-style-type: none"> ・音や声を聞こえやすくしている（9名） ・雑音(机などを動かす音)までも大きくしてしまう（5名） ・マイクがついている（5名） ・しっかりとはめていないとピーと音が出る（5名） ・水にぬれるとこわれる（2名）
3 耳が聞こえにくいことで知りたいことは？	<ul style="list-style-type: none"> ・耳が聞こえにくいってどんな気持ち？（3名） ・早口言葉はわかるの？（3名） ・耳が聞こえにくいことで困ってしまうことは何？（4名） ・どうやって口の形で言っていることがわかるの？（2名） ・聞こえにくい時はどうしているの？（1名） ・補聴器をとったら全然聞こえないの？（1名） ・聞き間違いはいっぱいあるの？（1名） ・補聴器をしても聞こえない人はどうするの？（1名） ・友達と話していて聞こえづらいことはある？（1名） * いつかは補聴器をとっても聞こえるようになるの？（1名）
4 補聴器のことで知りたいことは？	<ul style="list-style-type: none"> ・補聴器はどうやって聞こえるようになっているの？（5名） * どれくらい、どんなふうに聞こえるの？（4名） * 補聴器を大切に使うにはどのようなことをしなければならないの？（1名）

資料 「補聴器をつけている友達と話すとき」

話をするとき友達に気をつけてもらいたいことを、難聴児とともに話し合った。そして、「補聴器をつけている友達と話すときの話し方・声のかけ方」としてプリントにまとめた。学級の友達にこのプリントを配り、難聴児自身が読んでわかってもらうようにした。

「補聴器をつけているお友だちと話すとき」

- 1, 補聴器をつけているお友だちの前に立って話してください。
 - 2, 補聴器をつけているお友だちに、口の動きがよく見えるように話してください。
 - 3, 呼んでも聞こえないときは、肩を軽く「とんとん」としてください。
 - 4, 少し大きい声で、少しゆっくり話してください。
 - 5, 一度でわからないときは、もう一度やさしく話してください。
- それでも、わからないときは、紙に書いてください。

資料 ロール・プレイング

難聴児の気持ちを理解しやすい活動として、ロール・プレイングを取り入れた。内容は、学級の友達にわかってほしいこととして、難聴児自身が考えた。

友達「今度の日曜日、一緒に遊ぼう」	難聴児「えっ、もう1回言って」
友達「今度の日曜日、一緒に遊ぼう」	難聴児「えっ、何？」
友達「今度の日曜日、一緒に遊ぼうって言ったのよ」	難聴児「えっ？」
友達「もう、いい！」または「何でもない」	難聴児「……………」

資料 補聴器体験

補聴器を県特殊教育センターから9台、千葉県立千葉聾学校から12台借りてきて、2人に1台ずつ配り、補聴器体験を行った。学級の子どもたちだけでなく、学級担任や校長や養護教諭にも体験してもらった。

【学級の友達からAちゃんへの手紙】

Aちゃんがどれくらい補聴器を大切にしているかがわかりました。
これからもわからないことがあったら、聞いてくれるとうれしいです。
Aちゃんともっとたくさん話がしたいです。

私は、今日初めて補聴器をつけてみたけれど、イスを「ガタンッ！」で落としたとき、いつもより大きな音にびっくりしました。きっと、Aちゃんはそうじの時間、イスや机をひきずる音がすごくうるさいんだね。同じそうじ場所になったら、イスを落とさないようにするね。

Aちゃんが補聴器をつけて人の話をいっしょうけんめい聞こうとしているところを何度か見かけました。これからもがんばってね。
Aちゃんが補聴器をつけていて、いろいろな「音」が一斉に耳に飛び込んできて、うるさかったり耳が「キーン！」となったりして、大変だと思います。
私もつけてみたとき、耳がキーンとなったので、いつもつけているAちゃんは大変だろうなと思いました。

「聴覚障害理解のための教材開発とそれを活用した授業」

志布志町立香月小学校（ことばの教室）宮内まり子

ことばの教室と在籍学級とのやりとりを通して

1 はじめに

Y君は小学5年生である。小学2年生の2学期末に「サ行の発音がうまくできない」という主訴で教育相談を受けた。声量が弱く口型がはっきりせず全体的に発音が不明瞭になっているほかに、聞き返しが多く初対面では十分な会話が成立しにくい状況が見られた。耳鼻科での聴力検査を受診することをお勧めして、3学期から通級することになった。

通級指導の初日に資料1のような聴力であることが知らされ、ここから保護者も一緒に「聴覚障害」や「聞こえにくさ」「コミュニケーション」「家庭や学校での配慮事項」について学んでいくことになった。

2 前担当の記録から

初年度はサ行の発音練習を中心に学習。学級の中でのともだち間で起きる問題について、Y君の話し相手、聞き役になっていた。

3 4年生時の学習をスタートするに当たって

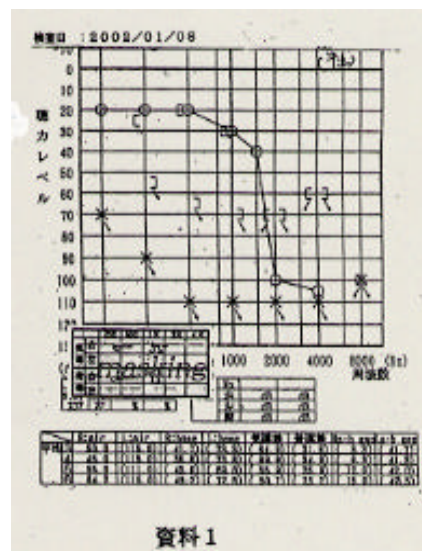
前担当との引継ぎや本児の実態・保護者との話し合いから、4年生の学習内容を次のように考えた。

本児に対しては、

- ・ 発音や聞き取りの改善
- ・ 読解など言語学習
- ・ 自分の障害の自覚・認識学習「じぶんのことをしらべてみよう」...資料2

家庭や在籍学級とは、

- ・ 本児自身が「トラブル」と呼んでいる友達関係の課題を、連絡帳や資料提供(みみサポート)により改善する...資料3



資料1

4 授業の記録・連絡帳より

月	ことばの教室の授業	保護者(母)・在籍学級担任(担)の記録
4	自分についての自己紹介 Y:「強くて優しい子にと言う願いで僕の名前がつけられた。ぼくは、耳が聞こえにくくて、聞き誤りや聞き漏らしのおっちょこちよいのところがある。」	母: 聞こえにくさについて・友だちとのトラブルの対処法について、担任や友だちに説明していきたいけれど、「我が子かわいさからの身勝手な願いだ」と思われそうで方法がわからない。

5	<p>自分の快適な聞こえの範囲を、CD プレーヤーのボリュームを動かして調べる。</p>	<p>担：わかっていたつもりでもわかっていない点が多々あることに気付きました。 聞こえにくさ理解の子供向けの本を紹介していただけるとありがたいです。私自身もぜひ読んでみたいと思います。</p>
6	<p>耳の中の様子と自分の聞こえについて学習 Y：「お母さん、僕はどっちの耳が悪いんだっけ？」</p> <p>オーディオグラムの見方についての学習 Y：「だんだん聞こえるようになるの？がんばると耳はよくなるの？」</p> <p>じぶんの聞こえにくさや困ることについて話し合い Y：「聞こえにくくて困ることは特にない。」</p> <p>単語の聴取弁別・確認 自分が聞き漏らしてわからなかったのか、よく聞いていたけどわからなかったのか話し合う Y：「一生懸命聞いたけど判断できなかった。蝸牛の調子が悪いからしようがないのかな」</p>	<p>母：私も一緒に勉強できて良かったです。自分の聞こえについて本人も意識することができないので「自分の障害」について理解するのは難しいし時間がかかるのだらうなと思いました。 担：学習したことを詳しく説明してくれました。絵本も子どもたちと一緒に読みました。</p> <p>担：現実を受け止め自分なりにがんばろうとしている Y 君を思い浮かべ、なんともいえない思いです。</p> <p>母：頭の中で想像しながら聞いているというのは確かにあります。半分位理解して返事をして行動に移すので、『わからなかったら自分からもう一度言ってといいなさい』と言うのですがなかなかです。 担：そういえば学校でも度々あります。まわりの子どもたちも教えるタイミングを失いそれがトラブルにつながることもあります。 担：日直の時友だちに「もう一度言って下さい」と何度か言われましたがめげずに伝えていました。</p>
7	<p>聞こえにくい人のコミュニケーションのいろいろを話し合う Y：「ぼくは耳と話しことばを使っている。指文字や手話は『はーん』という感じ。」</p>	<p>担：グループの仲間との会話が増えてきました。担任のところに直接聞きに来て用を済ませることが多かったのですが、このごろはまわりの子に聞くようになりました。</p> <p>母：一学期は自分の障害や聞こえについての学習は難しいなりに Y にとって良かったと思います。</p>

9	<p>下校途中気持ちの悪い音が聞こえて恐くて泣いて帰ってきたとの報告より</p>	<p>母：夏休みは親子3人の静かな生活でしたから学校が始まると、わいわいがやがやの生活は必要な話を聞くのに神経を使い疲れるようです。 担：「聞こえなかったのもう一度言ってください」と指示を求めることが増えました。周りの様子を見て「いっけない」と思ったそうです。</p>
10	<p>紹介ビデオ作成の計画 相手に分かりやすい話し方に気をつけることを目的に作成</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>学校紹介 運動場 校舎 ことばの教室 インタビュー 校長先生 司書の先生 ことばの先生 授業の様子の紹介 聴き取りや発音練習の様子</p> </div> <p>発音がうまくできなかった時、聴き取りを間違った時、「どうしてぼくはこうなんだろう」と自分を責めるような態度が見られます。一生懸命やればいいんだよと話しています。友だちに見せるビデオには、間違っ てやり直しをしている場面も入れていいと言っています。</p>	<p>母：聴覚障害は見えにくい障害だと言われて います。一人ひとり聞こえ方も違うしそれを他の人は理解することができません。親子でありながらも Y の音の世界をわかってあげられず、なんとも言えないときがあります。...手話サークルに入りました。</p>
11	<p>友だちからの手紙について話し合う...資料4 Y：「みんながしんけんにぼくの作ったことばの教室のビデオを見てくれたのがとてもうれしかった。ただひとつお願いがあります。みんながだらだらしていたり、さわい だりする声がうるさいので静かにしてください。」</p>	<p>母：教室で Y を理解してもらうために心配りや話をしてくださっていることを知り、ありがたく思います。家庭でも少しずつ改めて行く事を注意します。 担：ビデオ見せていただきました。学級の子供達は素直に反応してまいした。Y君のがんばっている様子も伝わってきましたし、Y君理解にも繋がりました。</p>
12	<p>友だちの手紙から自分がこれから気をつけようと思うこと、もっと友だちにわかってほしいことを、紙芝居に作る。...資料5 Y：「最近はともだちとのトラブルが</p>	<p>担：お返事ありがとうございます。クラスの子どもたちも喜んでいました。授業で早速使わせてもらいました。 母：最近の日記には昼休みにサッカーをやっていることが書かれていてとてもうれしい</p>

	<p>少なくなってきたよ。ともだちが野球に入れてくれなくても下手だからがまんしている。乙武さんは乙ちゃんルールをみんなが考えてくれたよね」</p>	<p>です。身体を動かすことが苦手な Y が友だちと遊んでいる姿をこっそり見てみたいのです。ビデオ作成も学級の友だちに理解してもらおうきっかけになりました。</p> <p>担：お互いを理解し合い共に学んでいくことは大人でも難しいですが、子どもたちと取り組んで行きたいと思います。</p>
2	<p>テレビを快適に見るための工夫を考え、文字情報について調べる</p> <p>Y：「ゾイドなど見ている時に、時々なんでそうなるのと意味がつかめなくなることがあるよ。」</p> <p>自分の好きな所や直したいところについて話し合う</p> <p>Y：「好きな所は、よく本を読むところ、運動をするところ、勇気があるところ。直したいところは、おこりんぼうをするところ、すぐカッとなるところ。」</p>	<p>母：ビデオライブラリーで字幕入りビデオを借りることができるようになりました。自覚しているのかいないのか、テレビより本を読むことが多いです。テレビだと 100%理解できないからでしょうか。また新たな世界が広がって行くかもと期待しています。</p> <p>担：給食時間にトラブルが生じました。双方の話を聞いていると食い違いが多いことに気づき、Y君とさらに話すことでした。「事實はしっかり話すことにしよう」ということを今後も気をつけていくよう話しました。</p> <p>担：「6年生を送る会でリハーサルの時と場所が変わっていました。後で聞いてみると、隣の男子が『こっちの方が安定しているよ』とサッ変わってくれたのだそうです。自分で判断して行動に移すことのできる子どもに頼もしさを感じました。</p>
3	<p>気持ちについて考える</p> <p>嫌なこと・好きなことをがまんしないできちんと周りに伝えよう。でも相手の気持ちも考えてね。</p>	<p>担：この頃良いことも悪いことも含めてY君と人間関係について話すことが多くなったように思います。「ぼくはこう思うよ」というようなことばがよくできるようになりました。</p> <p>母：「自分の聴覚のことを理解し、その事をまわりの人達にも理解してもらおう」と難しい課題にも取り組みました。来年度もまたステップアップできるように親子で通級していきたいと思います。</p> <p>担：たくさんのごとにがんばりたくさんのごとを考えた一年でしたね。大事なことはその時その時を一生懸命生きることですよね。これからも共にがんばって行きましょう。</p>

4 まとめ

高音急墜型の聞こえ理解のむずかしさ、小学校2年生までそのことが発見できなかったこと、また保護者の丁寧な子育てで言語の発達に顕著な遅れがなかったことなどから、Y君は、授業中も友達関係の中でもほとんど配慮のない状況ですごしてきていた。

「がんばる」と言うことばが好きな彼らしく、4年生のはじめには「ようし、ことばの教室でがんばって練習して発音もおすぞ！注意して聞いたり、わからなかったことは聞き返したりすることもがんばるぞ！」そんな意欲にあふれており、自分の聞こえにくさについては、客観的な理解が不十分であるように思えた。

そんな中で、本人の口からよく聞かれる友達関係でうまくいかない「トラブル」は起きていたし、保護者も一方的な不利益を受けやすいことをなんとかうまくまわりに説明していきたいという思いも強くしておられた。

そこで、Y君に対しては、自分の聞こえについてもっと深く知ろうということと、自分ががんばることと周りに対して助けて欲しい・考えて欲しいことを少しずつ整理する学習を計画し、そのことをY君の学級での生活に還元していけたらと、積極的な発信をすることにした。

担任のM先生は、毎回丁寧な連絡帳への記入やことばからの発信に対してもその都度応答して下さり、学級担任の立場からことばの教室の授業に積極的に関わっていただいた。紹介ビデオのやり取り学習の後には「学級の子どもたちだけではなく保護者の方々の理解も得たい」と学級PTAで、難聴や我が子のことについて話をする機会を保護者に準備してくださった。

4年生時の一年間で、Y君自身がどれくらい自分のことを知り、その上での考えを持つことができ、実践化できるようになったかはわからないところがあるが、保護者はわが子に対して「まだまだ・・・」「もう少し・・・」という思いはありながらも、このままもう一年、M先生の学級で成長を願うほどの信頼ができていった。

この事例の中で聴覚障害理解のための教材として取り出すと、連絡帳・難聴理解資料「みみサポート」・ことばの教室紹介ビデオ・その後のお返事資料くらいしか挙げられない。日常の通級指導の中で、その時々の実践を積み重ね、Y君の在籍学級での生活に必要なことを検討し作成していったにすぎない。Y君をはさんで担任の先生との関係が深まる中で、一つひとつのささやかな教材を担任と保護者により十分に活用し生かしていただいたという気がしている。

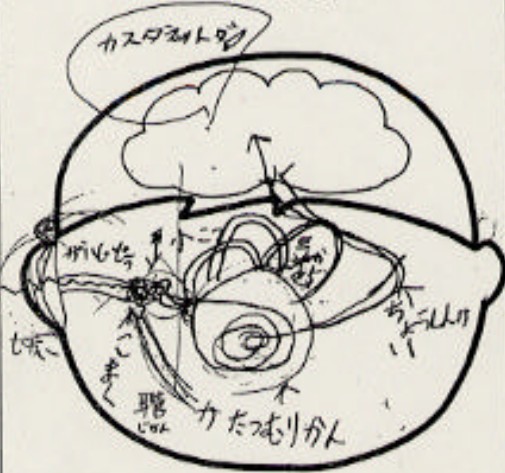
本事例が他の通級児童にも同じように進められたわけではない。また、担任の先生が変われば新しい関係が始まる。5年生になって学級編制があり、担任も替わった。そこで、新たな学級には早速Y君と一緒にビデオレターを作った。「先生にも友だち一人ひとりにも、自分のことを説明し、お願いすることは大変だからな。」と緊張しながらも、伝えたいことを考え、自分はどの部分を発表するか担当者と役割分担し、意欲的な活動となった。

...資料6

学級担任と難聴通級児童の障害理解のための教材は、一人ひとりの在籍学級での過ごし方や友達関係、学習理解の状況を踏まえて個別に考え、通級指導教室からの一方的な押し付けにならないように留意し、その子を取り巻く学級や家庭との様子や要望を取り入れながら準備されることが基本になると考える。

2 耳の中は どうなっているの？
音は どうやって聞こえるの？

耳の中は こうなっているよ



耳の中は きれいですか

音は こうやって聞こえるんだよ

「かなかな」
「カネウエ」
「カネシロ」
「ウエシロ」
「シロカネ」
「カネウエシロ」
「ウエシロウエ」
「シロカネシロ」
「カネウエシロカネ」
「ウエシロウエ」
「シロカネシロ」
「カネウエシロカネ」

6 コミュニケーションの いろいろ 1

ともだちや先生 家の人と 話す時に どんな方法 を 使いま
すか？ もっとよくわかり合えるためには どんな 方法がある
でしょうか？

方法

① 目 指差し
自分に合った補聴器や耳
を使って、簡単に話しの
内容がわかる。

人の話をちゃんと
ける。
◎さしまちがいはけつ
よは早くあひもある。

② 顔 顔
（口の形を見る）
話している人の くちび
るやしたの動きを見て、話
しの内容がわかる。

◎さしまちがいはけつ
なになりまよ
△よまじりの形のと
△遠くからいかに
の話をしているよ

12 わたしの・ぼくのきこえ調べ 1

音やことばがどれくらいきこえますか？あてはまるもの□をつけてください。

- 補聴器をいつもつけていますか？
□ 一回つけている 学校に行く時だけ
□ 常にいるときだけ □ つけていない
- 授業中、友だちの発言が聞こえないことがありますか？
□ よくある □ ときどきある □ ぜんぜんない
- まわりが静かな時、先生の発言は 聞こえますか？
□ つも聞こえる □ ときどき聞こえない □ ぜんぜん聞こえない
- 体育館など広い部屋での集会の時、話題は聞こえますか？
□ いつも聞こえる □ ときどき聞こえない □ ぜんぜん聞こえない
- 休み時間、友だちに話しかけられた時、わからないことがありますか？
□ よくある □ ときどきある □ ぜんぜんない
- 校内放送は聞こえますか？
□ つも聞こえる □ 話かわからないことがある □ 聞こえない
- グループの話し合いは、よくわかりますか？
□ よくわかる □ わからないことがある □ ぜんぜんわからない
- つくえやいすを動かす音が、やかましいことがありますか？
□ よくある □ ときどきある □ やかましくない

13 耳が聞こえにくい人たちが こまっていること

耳が聞こえにくくて困った時、誰かだめと思うことはありませんか？
日常生活の中で・・・（家庭・学校・職場など）

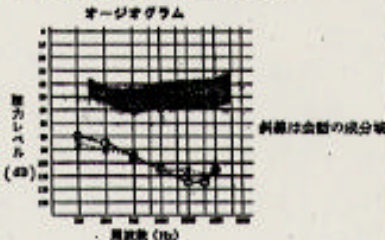
- ◎ 親切にしてあげたんだけど
- ◎ のに行動をぶかいてくること
- ◎ よいめられること
- ◎ 話し合いがはじまるとの音が
- ◎ カリにしたい
- ◎ 電音者の音もたまに
- ◎ カリにくいのでXをやるこ
- ◎ とがある。◎ どの部屋でも
- ◎ 外に出て・・・（町の中・乗り物の中・駅・アパートなど）
- ◎ ダイエーでは、しきりなく
- ◎ だててせ、ホークスの音
- ◎ 楽がうるさくて困る。
- ◎ 店内が放送がうるさくて
- ◎ お母さんとの大事な
- ◎ 話がでえない。

お母さんサポート NO. 3 東京都立豊洲小学校

ことばの教室

これは、人さんの聴力の状況です。○が右耳、×が左耳、△が聴覚器を着けた聴こえの様子です。右耳に1000Hz（0000の時のポッ・ポッ・ポッ・ポッ）のビーの音の高さが80dBを聴かせると105dBより強い音は聞こえませんがそれより弱い音は聞こえない状況です。

右耳の平均聴力は105dB、左耳の平均聴力は108dB
左耳に聴覚器を着けると44dBになります。



3. 聴覚器のしくみ

この聴こえの状態は一人ひとり異なり、また、同じ聴力でも聴覚器の使用の状況はそれぞれ異なっています。そして、耳に音が入ってくる・音が聴こえる・聴き分けをする・聴いたことと状況判断が一致することも一人ひとり異なります。

お母さんサポート NO. 4 東京都立豊洲小学校

ことばの教室

教室の中で考える配慮

1. 座席の位置
前方が望ましいです。聴覚器は話しから1から3メートルの位置でいい状態で聞き取れるように調整してあります。ただし、周りの様子を見ながら状況判断して行動しているところもあるので、1番目よりも2番目の方が望ましい様子がよく見えるでしょう。
2. 話す時は・・・
顔・口元がよく見えるようにします。
○口頭や表情を参考に話の内容をつかむことが多いです。
○文章は短め、簡潔に
○少しゆっくり目でも、一言一言聞かずに
○文字や身振りも有効です
3. 聴覚器は・・・
聞こえにくいけれども、大きな音・遠く音にも敏感です。椅子のガタガタ・おしゃべりやガヤガヤ音はうるさがることあると思います。つまり、快速に聞こえる範囲が狭くなっています。
また激音や水に大変弱い、高周波領域です。
4. クラスの友だちに・・・
○聞こえにくいことや、聴覚器の役割について話してください。
○聞こえにくい場面やわかっていない時（校内放送・ブーム時など）や近くにいる子に教えてくれるよう話してください。
聞こえにくさ理解の子供向けの本等、必要でしたら連絡ください。



お母さんサポート NO. 5 東京都立豊洲小学校

ことばの教室

通知や宿習学習、修学旅行など、校外学習の時期となりました。いつもの学校生活とは異なった環境の中では、聞こえに障害を持った子ども達は、聞こえる子どもたち以上に不安が大きいものと思います。それは、

- ・ 見学をしながらまたは活動しながらの口頭による説明は、周囲の様子や音に邪魔されてよく聞こえない上に、説明もしにくい。
- ・ ハンドマイクでの指示や館内放送・防災放送などが伝わりにくい。
- ・ 急な予定変更や指示がきちんと伝わらない場合、どう行動していいかわからない不安になります。



このような支援が考えられる

- ・ 同じ班の友だちに助け合うことを教えてほしい。聞こえにくい状況やわかっていないような時には、近くにいる友だちに援助してもらえよう関係を！
- ・ 特に緊急の事態の指示には気を配ってほしい。
- ・ 文字情報による案内（しおり）などは、事前に活用されやすい。

先日授業の中で・・・夫人になって一人暮らしを始めた「児童」が「見学し時間がある」「電車の音がわがりにくい」「ドアのチャイムがわからない」「そんな話をすすめていたら、「やっぱり聞こえない人は聞こえる人のサポートがないと生きていけないんだ」と耳障りがつきました。「聞いていたら話がわかってもらえるよ。」「アフレコも聞き取れないよ。」安心して大人になっていってよ。自分への自信と勇気をもって欲しい。そんなことを考えさせられた授業でした。

お母さんサポート NO. 9 東京都立豊洲小学校

ことばの教室

学習のひとつ

11月のある日、保護者も子どもも思いがけずの出来事となりました。それも初めて2日間。「友だちとよって・・・」「話を聞いて・・・」というそれぞれの報告でした。お母さんの話しや顔と、子どもの話しや顔（それも大好きなお母さんに話したい思いをきかせ、またよかったという顔も一緒に現れ始めました。その両方は別々の話しや顔と、連絡それぞれの話しや顔と聞き取りながら話し合う授業をしました。その中で気づいたことは、

- やったこととわかれたことは事実として話しているけど、どうして自分はそうなのか、ことばでもちゃんと話を聞きたかった、聞いてほしいもしくは第三者の目に触れる中で話したい、手を感じました。

また、たまたま二人のグループ学習を始めたので、自分の好きなところ、嫌いなところ、成したい気持ちをしました。「誰にでも好きな自分と嫌いな自分がいるよ」というとそれぞれに書き出し、そのうち「誰に嫌いなところも書いてくれました。その授業の中で感じたことです。

- 自分の好きなところと、嫌いな自分、成したい自分は別のことを書くこと

いつも周りに人がそう言われたり聞かされてはいるのだけれど嫌いな自分、でも、私や彼の代わりには誰にもないから、自分のことは自分が一番大事にしてね。好きになてね。」とまとめた。うーんと考え、それでもやはり「お父さんお母さんが一番好きなのはあなただ。」って書かれたりした。

その日の朝の先生方からの連絡帳からは、「一人ひとりとじっくり向き合いたい」「自己中心的・わがままと言われやすい事を、本人の理解と聞こえにくさによって起きていることを分けて考えたい」とお母さんからの連絡がありました。

聞こえなくても聞こえにくさを持っていても、どの子どもでも大人もそうでしょうが、自分を大切に自分で生きていきたいと願っています。自分に対するマイナスのイメージや自己否定感から、あるがままの自分のペースで生きていっていいのだという気持ちをぜひ育み上げてほしいと願っています。「向後は自分が一番好き！」って言うときとんとしてくれる顔がにっこり笑顔でした。



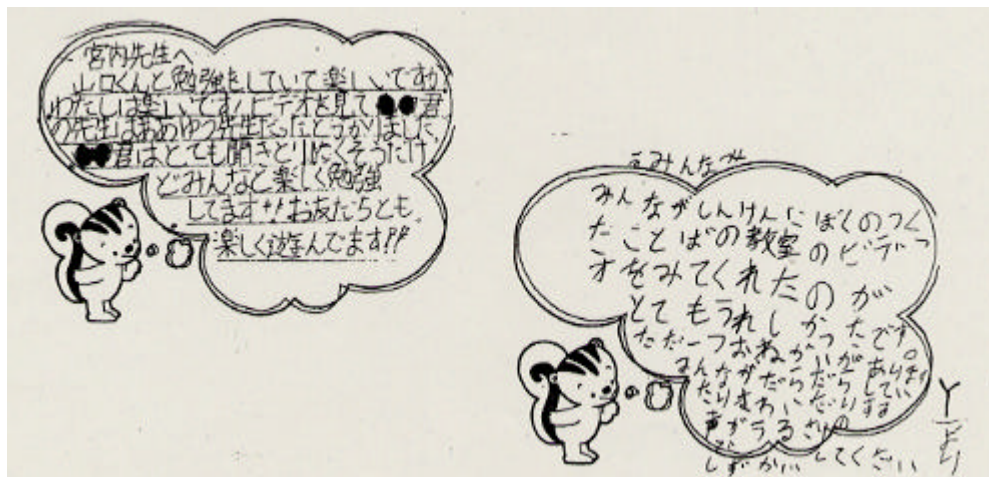
1組の友だちからのメッセージ

Yくんへ

- ・ ことばの教室は思っていたより楽しそうにですね
- ・ 発音練習や聞き取りの勉強がんばってね
- ・ Y君はがんばっているなあ
- ・ 本を読んだり聞き取って言ったりするのはすごいと思います
- ・ 早く「さしすせそ」などじょうずになってね・複数
- ・ 目も悪いし耳も悪いので大変ですね。
- ・ ことばをはっきり話せないからがんばってほしいです。
- ・ ビデオを見せてくれてありがとう。
- ・ たいへんなことをがんばっているからすごいですね。
- ・ いろいろと苦労しているんだね。
- ・ 保育園のときはあんまりわからなかったけど、耳のこと初めて知りました。
- ・ いろんな先生にインタビューして どうでしたか？

担当へ

- ・ ことばの勉強がわかるようになるには、何日くらいかかりますか
- ・ どうしてことばの教室の先生になろうと思ったの？
- ・ Y君とはけんかもしたりするけど仲良しです。
- ・ Y君は、笑ったりおこったりずっこけたりしています。
- ・ ことばの教室の先生は、いろんな人と勉強してわけがわからなくなりそうです。
- ・ ことばの教室はとても楽しそうな学校ですね。
- ・ 学校ではとても聞き取りにくそうだけど、みんなと楽しくお勉強しています。



さしすせその発音について ③

ビデオの中で山口君が「ききとり」や「発音」の練習をしている様子を見してもらいました。おたよりの中に「早くじょうずになつてね」とか「聞きとれるようになってね」とたくさんの方のほげましのことがありました。がんばり屋さんの山口君は、いつも真げんです。

でも、どんなお面者さんでもききをなおすことはまだできないし、自分の耳にとどかない音をきいた発音することはとてもむずかしいことです。

このお面者さんには、ききとりの練習が大切



キキユウ

ききにくさやききえ方は、人によってさまざまです

さしすせそやちやきが はまり 聞きとれなくても ④

「ほろ□ようて ゆびを □って □がでたら」と言われたら □には 何が 入るか 頭の中で 聞いて 意味は、わかります。

聞きえにくくするために 苦手なことは まだ あります。

- 歌のメロディーを正しく歌うこと
- うるさい中や グループで 話すこと
- 遠くの人と 話すこと
- 音楽に合わせて おどること



人間 だれでも
とくいなことと 苦手なこと
好きな自分と なおしたい自分
が いるよね。

聞きまちがえたり、聞き返したりしても
いやな顔をしなくてほしい。
(お願いするのには、こう勇氣が必要)

静かな場所で 1対1で
話すのは 大じょうぶ。



うるさい
が
おもしろい

資料6 5年生の学級へ ビデオレター内容

T...担当者 Y...通級児童

1, 聞こえの仕組みについて

T:「 小学校5年1組のみなさん, こんにちは。香月小学校ことばの教室の宮内です。今日は, Y君と一緒にことばの教室からお話したいと思います。Y君はどうしてことばの教室にきているのですか? 」

Y:「ぼくは, 耳の聞こえが聞き取りにくいので, 発音の練習や聴き取りの練習をしにきています。」

T:「そうですね。Y君はみんなと違って耳の聞こえが悪いです。では, 聞こえるとか聞こえないとか言うことはどういうことなのでしょうね。この図を見てください。

(耳の中の図)

カスタネットの音がカチカチとしています。この音はまず...

Y:「耳介から入っていきます。」

T:「そして外耳道, みんなが耳かきをするところを通して...」

Y:「鼓膜を通ります」

T:「そうですね, 鼓膜をぶるぶる震わせます。そしてこの小さな三つの骨が...」

Y:「耳小骨と言います。」

T:「この三つの小さな骨の橋を渡って, このぐるぐる巻きのカタツムリのようなところが...」

Y:「蝸牛です。」

T:「蝸牛の中を通して聴神経を通して脳に伝わります。するとこの音が頭の中で『あっ, カスタネットの音だ』とわかる仕組みになっています。」

2, 聞こえにくさ 聴覚障害について

T:「では, Y君はこの耳の中のどこが調子が悪いのですか。」

Y:「ぼくは, この蝸牛という器官が調子が悪いのです。」

T:「そうですね, この蝸牛が少し傷ついています。鼓膜や耳小骨や外耳道は, 手術や薬で治る事もありますが, 蝸牛を治すことは難しいと言われています。この, 後ろにあるのがオーディオグラムと言います。耳の検査をすると, 皆さん聞こえる人の耳は, この0dBの辺りが聞こえます。ひそひそ話も遠くから呼ばれても, 小さな虫の声も大きな太鼓の音もみんな聞くことができます。ところがY君の左耳はどの辺りで聞こえていますか。」

(オーディオグラム)

Y:「110dBの辺りです。」

T:「そうですね。トラックの走る音やジェット機のゴーッと言う音が聞こえるかなあという所です。右耳はどうですか。」

Y:「50dB位です。」

T:「そうですね。低い音はみんなと同じくらい聞こえているけれど, 高い方では犬の鳴き声が聞こえるかなあという辺りです。例えば, 『なつやすみ』と言うことばは, 音が小さくなった上にとこどこ正しく耳に入ってきません。みんなと同じように聞こえているわけではありません。」

(図)

n a t u y a s u m i

n a t u y a s u m i

n a t u y a s u m i

3, 聞こえにくくて困る事

T:「それでは Y 君は聞こえにくいと言う事ですが, 学校の中ではどういうことが困っていますか?」

Y:「後から言われる事がわかりにくくて困ります。それから, 放送がわからないことがあります。」

T:「そういう時には皆さん, 教えてくださいね。」

Y:「それから, 周りが騒がしいとちゃんと聞き取れないことがあります。」

T:「そうなんですか。それではみなさん, こういう場面を考えて下さい。先生が, 耳の聞こえにくいお友達に『昼休み何して遊ぶの?』と聞いています。ところが, Y 君の周りではお友達が昼休みになったのでペチャクチャ, ガヤガヤお話をしています。それから隣のお友達が, 机や椅子をガタガタ動かして運んでいます。そしてどこかでは, 筆箱がガチャンと落ちたようです。『昼休み何をして遊ぶの?』と言われた声は, おしゃべりの声や, 椅子や机を運ぶガタガタの音, 筆箱が落ちたガチャンという音にかき消されて, 何がかんたかわからなくなってしまいました。」



4, みんなへのお願い

T:「さて, そんな Y 君から皆さんにお願いがあるようです。」

Y:「ゆっくり目に話してください。前の方から話しかけてください。それから, わかりにくいことはメモに書いてください。例えば遊びの時の時間などは教えて下さい。よろしくお願いします。」(絵カード)



T:「耳の聞こえにくいお友達は みんなといっしょに学校生活を送っています。いろんなところで困る事があるようです。Y 君が, 一番淋しい思いをする事はみんなと遊ぶ約束をする時に, 時間を間違えたり, 遊ぶ場所がわからなかったりする時のようです。そんな時は, 例えば文字に書いたり, 身振りで伝えたりするとわかり易いと思います。これからも, みんなといっしょに楽しい学校生活がすごせるようにと思います。これで, 耳の話や聞こえにくさについての話を終わります。さようなら。」

1. はじめに

特殊教育諸学校に特に設けられている教育課程として「自立活動」がある。本学では聾学校の教員を目指す学生のための授業科目として「聴覚障害自立活動」を用意している。筆者はその授業を担当していて、授業内容の一部で「聴覚障害の理解」を取り上げている。聴覚障害の理解は、聴覚障害児と係わるひとにとっても聴覚障害児自身にとっても必要なものである。さまざま視点から聴覚障害への理解を深めることができるが、聴覚障害を的確に理解することは容易ではないとも言える。ここでは「聴覚障害の理解」教材として制作されたビデオの内容を紹介する。

2. 2つの作品の紹介

1) じんくんと補聴器

ストーリー構成は以下のようになっている。

<オープニング：「じんくんと補聴器」のタイトルと手描きイラスト>

<聴覚障害児じんくんの紹介>

「私たちはいろんな音に囲まれている いえの中で 街の中で」

「じんくんはこんな大きな音でないと聞こえないんだ」

「聞こえないことで困ったり危険なことがある」

「車が近づいてきても聞こえない」「駅のアナウンスが聞こえない」

<聞こえないことを補う器械：補聴器>

「いろいろな種類の補聴器」

<音はどんなふうに入っていて伝わるのだろう：私たちの耳のしくみ>

「音が耳から入って脳まで伝わって聞こえたとわかるのだ」

<補聴器のはたらき>

「補聴器をつけてみるといろんな音が大きく聞こえる」

「聞こえなかった音が聞こえるようになって役立つけれど万能ではない」

「テレビを見てみよう」

「静かなところで見るテレビとざわざわしたところで見るテレビ」

「まわりが静かでなければテレビの音は聞き取れないよ」

<補聴器をつけている友だちとの接し方・話し方>

「あいての前に立って、はっきり話しましょう」

「うまく伝わらないときは、紙にかいてみましょう」

「みみもとでさわぐのはやめましょう」

「補聴器で遊ぶのはやめましょう」

< 教室の中の雑音を小さくする工夫：テニスボールの活用 >

「椅子の脚に使い古しのテニスボールをつけるとこんなに静かになるよ」

< エンディング：参考図書を紹介 >

ビデオ画面は、オリジナルに作った手描きのイラストと、参考書として取りあげた「障害を知る本：耳の不自由な子ども達」から引用した写真やイラストから主に構成され、雑音下のテレビとテニスボール場面は現場をビデオ撮影したものが組み込まれている。

2) 遠慮しないで助けてあげよう、遠慮しないで助けてもらおう

構成は以下のようになっている。

< 歌「明日があるさ」の歌詞提示：音声なし、音楽なし >

< 5名の学生による「明日があるさ」手話付身体パフォーマンス >

5名の中に聞こえない学生 T が含まれている。音楽に合わせて5名揃って軽快に踊る。

< 聞こえない学生 T の自己紹介とストーリーの導入 >

音声なし文字提示

T の手話による語りかけ：音声なし、字幕なし

T の手話による語りかけ：音声通訳つきで再提示、字幕なし

自分の名前、耳が聞こえないことを紹介。

「友達とのやり取り、耳が聞こえなくとも気持ちがあれば通じ合えるよ」

「友達がサッカーを一緒にしようと誘っている場面を見て欲しい。」

< 「サッカーしようよ」場面 1：肩をたたいて呼ぼう（イラスト提示） >

シナリオを文字提示

やり取りの実演：T が本を読んでいる。友達 M が背後から「サッカーしようよ」と音声で誘う。でも、T は気がつかない。M が肩をたたいて気づく。ふたり一緒に出かける。

< 「サッカーしようよ」場面 2：ゆっくり話そう（イラスト提示） >

シナリオを文字提示

やり取りの実演：T が本を読んでいる。友達 F が肩をたたいて「サッカーしようよ」と音声で誘う。でも、T は話しが読みとれない。F がはっきりした口形でゆっくりと「サッカーしようよ」と言う。ふたり一緒に出かける。

< 「サッカーしようよ」場面 3：書いて伝えよう（イラスト提示） >

シナリオを文字提示

やり取りの実演：T が本を読んでいる。友達 N が隣に座って「サッカーしようよ」と音声で誘う。でも、T は話しが読みとれない。N は紙を取り出し「サッカーしようよ」と書く。ふたり一緒に出かける。

< 「サッカーしようよ」場面 4：みぶりで伝えよう（イラスト提示）>

シナリオを文字提示

やり取りの実演：T が本を読んでいる。友達 O が肩をたたいて「サッカーしようよ」と音声で誘う。でも、T は話しが読みとれない。O がボールを蹴る動作をしながら「サッカーしようよ」と言う。ふたり一緒に出かける。

< 復習しよう：遠慮しないで助けてあげよう、遠慮しないで助けてもらおう >

場面 1 から 4 までの標語を、聞こえない学生は手話で、聞こえる学生は音声で、イラストを提示しながら、交互に繰り返す；

T：「肩をたたいて教えてもらおう」、M：「肩をたたいて呼ぼう」

T：「ゆっくり話してもらおう」、F：「ゆっくり話そう」

T：「紙にかいて教えてもらおう」、N：「書いて伝えよう」

T：「みぶりで教えてもらおう」、O：「みぶりで伝えよう」

< T からのメッセージ >

聞こえなくとも色々な方法で通じ合うことができる。「聞こえなくてかわいそう」思う人もいるかもしれないけれど、僕は聞こえなくてよかったです。その方が自分らしいからです。メガネをかけているひと、足が速いひと、絵が上手なひと、皆それぞれ個性をもっているでしょう。それと同じように聞こえないのも一つの個性です。

字幕で提示：音声なし

T が手話で語りかける：音声通訳付

< エンディング：「明日があるさ」の音楽 >

3. 筆者の解説と感想

2 つの作品とも素朴なできあがりだが、よくできている。学生は聴覚障害に関心を持っているので真剣に取り組んで作った。授業で「聴覚障害の理解」についてまず講義をするが、受け身で聞いているのと、小学校児童を対象として教材を作るように課題を与えられてそれに取り組むのとはまるで違う。

「じんくんと補聴器」ははじめてのビデオ教材作成であった。この作品はビデオを見る対象が聞こえる小学校高学年児童であると想定している。彼らに聴覚障害児が使っている補聴器がいかに大切なものであるか。また同時に、

補聴器をつけていても決してみんなと同じように聞こえるようになるわけではないから、こんなことに気をつけて接して欲しいと伝えている。オーソドックスな作り方をしていると言える。イラストをはっきりしたタッチで明るい色づかいで描かれているなどの工夫がなされているので子ども達もしっかりと見てくれる作品に仕上がっていると思われる。

「遠慮しないで助けてあげよう、遠慮しないで助けてもらおう」は、第1作を見てもらって、第2作目の作品として位置づけた。この作品の特徴は3つある。ひとつ目は、見てもらう対象を聞こえる児童とともに聞こえない児童も想定していること。むしろ聞こえない児童が主たる目当てになっている。2つ目はメッセージを手話と文字と音声で送っていること。3つ目は聞こえないひとがリズムカルなパフォーマンスで音楽を表現していることである。

聴覚障害児が通常の学校や学級で学んでいる場合、彼らは同じような障害を持っている仲間や先輩、大人に出会うことが少ない。この作品では聞こえない学生にメッセージを語らせている。これは聞こえる子どもたちだけでなく、聞こえない子どもたちに手話での語りかけを見てほしいという願いがある。通常の学級で学んでいる聴覚障害児はほとんどが音声言語でコミュニケーションをとっており、手話を知らない児童の方が多いかもしれない。しかし敢えて手話で語ってもらっている。聞こえない成人が使っているごく普通に使っている手話を見てほしい。すてきな表現手段だと感じ取ってほしいと願っているように思える。また、オープニングでの「明日があるさ」のパフォーマンスは、聞こえる学生をリードする形で聞こえない学生が音楽に合わせてリズムカルに踊っている。聞こえない人たちが楽しめる音楽はこういうものなのかもしれないと実感させてくれる。

4. まとめ

第1作目は聞こえる子ども達に目を向け「聴覚障害児を正しく理解して適切な援助をしよう」と呼びかけている。第2作目では、「遠慮しないで助けてもらってもいいんだよ」「遠慮しないで助けてやっていいんだよ」と双方に呼びかけ、ずいぶん歩み寄った雰囲気がつくられている。実際に子ども達にこの順序で見せるのがよいと思う。そして3作目が欲しくなった。筆者自身がこの2作を通して、「障害を理解して支援する方法を知ると考えるのは間違っていないのか」「障害ある児童が助けられる側、そうではない児童は助ける側としてと設定して果たしてよかったのか」と自問した。今度作られる第3作目では、聞こえない子どもが当たり前に自分たちの仲間として活動している姿を是非見てみたい。

障害を理解するとは？

東北大学大学院教育学研究科 教授
菅井 邦明

「障害を理解するとは？」という課題を私は極めて複雑な課題と考える。それは「人間にとって障害とは？」という課題と同義とも考えられる。この課題は医療・保健領域、福祉領域、障害教育領域、行政領域等の専門家の中で様々な考察がなされてきた。しかし近年その考察に新しい観点が加えられてきている。それは障害を持つ当事者の意見である。従来は健常者側からの検討がなされた。その過程では「障害受容」という言葉で検討されてもいる。ここでは、始めに健常者側と障害者側の障害理解の困惑例を次に健常者側からそれを乗り越える考え方の一例を示したい。

1. 水澤学さんの家庭と家族（親の会記事から引用）

水澤学さんの主張の大意は以下のとおりである。{自分は、家庭そして家族に対して大きな疑問を感じている。自分自身が聾者として生きる決意し、日常生活において、音声言語を必要としないことに慣れた頃から、この疑問は自分の中で大きくなった。母は「聞こえません」「分かりません」「声を出しなさい」と自分に向かって言う。弟は、「手話をやめて」「手話がなくても声だけで分かるから声を出して」という。食事時はいつも父・母・弟が楽しそうに話している。次第に家族との対話をする気持ちが失せてきたことを覚えている。そして家族と話しする事を拒否するようになった。・・・学校も周りの世界は同様だった。聾者と聴者いうだけでこうも苦しまなければならないのだろうか。家族との役割とは？}

このレポートは、音声言語を使用する多数派の健聴者が手話を使用する少数派の聾者を根本的にどのような認識で関わるかという問題を含んでいる。現在では手話も言語であるということが国際的に認められている。しかし聴覚障害教育でも歴史的には長いこと手話使用を禁止した時代がある。音声言語の使用困難な聾者への障害理解が健聴者側の論理で行われ、人間存在を根底から否定するような障害理解が行われた例である。

このような例は、歴史的には数多くあった。それを克服する障害理解の考え方が以下の例にある。

2．大江健三郎と息子光さん（新聞掲載記事から引用）

大江は、「若いころ実存主義の文学を勉強した。人生には意味がないと考えるのが出発点でした。だが障害を持つ長男が生まれ、それだけではやっていけないと思った。人間を根本のところから励ます文学、ドフトエススキーやブレイクを読み、息子のことを書き、その方向で仕事をしてきた」。『光の音楽には、彼が言葉では表現できなかった、一人の人間の豊かな表現がある。彼と共に生きた人生を理解できるぞと思えます』と言っている。この言葉から、我々人間は障害があろうが無かろうが、人生に意味を持たせないと生きていけないこと。そして脳障害を言葉で表現できなかった人間の音楽における豊かな表現を発見したことで方の一例であろう。このような考え方は、我々が進む方向を示していると思われる。

まとめ

聴覚・言語障害教育研究部

佐藤 正幸

「聴覚障害理解のための教材開発とそれを活用した授業」の研究を進めた結果、3つの知見が見いだされた。それは、1.音ときこえ 2.絵本、ビデオなどの教材 3.聴覚障害のある本人についてである。

1.音ときこえ

これは一般的に音とは何か、つまり聴覚の働きという知識の側面から始まることが多い。なぜ、これらが聴覚障害理解のために必要かという点、1つは現在の社会は音 聴覚中心の社会であること、もう1つはこの音 聴覚中心の社会において聴覚障害のある子ども及び成人が、音声がききとれず、情報不足で不便を感じていることを考えるためである。

大崎先生は、音ビデオ「音いっぱいだけど聞こえにくいんだよ」を作成し、子どもの身の回りには様々な音があり、それが意外ときこえにくいことを体験してもらいながら、聴覚障害のある子どものきこえについての授業を行った。一方、田原先生、宮内先生は、聴覚障害のある子どもが自分自身のきこえを知り、クラスの児童に自分自身のことについてのどのような話をしていくかを事前に学習する際に、音・聴覚の働きに触れている。

2.絵本・ビデオなどの教材

これまで、聴覚障害理解のために作成された絵本、ビデオのほとんどは聴覚障害のある子ども・成人のきこえ、補聴器などに関するものであった。今回、研究協力者らによって作成された教材の多くは、きこえ、補聴器に関するものは少なく、聴覚障害のある子どものコミュニケーション、ハンディキャップさらにはそれらが原因となる心理的葛藤を題材としたものであった。

鷲尾先生によるビデオ教材づくりでは、きこえ、補聴器の紹介はもとより、実際に聴覚障害のある成人を出演させ、「サッカーしようよ」という話題についてのどのような話しかけをすれば相手と通じあえるのかを検討し、一連の流れを寸劇形式で構成している。

田原先生は聴覚障害のある「ももこ」を主人公に作成した絵本「ハートはなにいろ」のよみきかせを行い、「ももこ」がきこえなくて困っていること、どのような話しかけならよくわかるのかということを具体的に指導している。

宮内先生は、ことばの教室の紹介ビデオを聴覚障害のある子ども本人と一緒に作成し、その子どもが在籍する学級の子どもたちにみてもらおう試みを行った。また、発音、ききと

りにくい言葉、きき間違えたり、きき返したりしてもいやな顔をしないで欲しいというような内容を盛り込んだ紙芝居も作成した。

3．聴覚障害のある本人について

聴覚障害のある本人について様々な角度から考えてみることは、今回の一連の研究成果において共通してみられた課題であった。聴覚障害の一般的な知識については、本などの資料に数多く取り上げてあるものの、それぞれの聴覚障害のある子どもについての資料は事例研究でもない限り、特に取り上げられることは少なかった。

このことについて、中瀬先生は、教材開発にあたっての検討項目の中で、聴覚障害理解のための「特設の授業」を設定するのではなく、実際の学級における聴覚障害のある子どもとの日々のかかわりそのものが、担任教師として一番の「教材」と成り得るとしている。さらに、学級に聴覚障害のある子どもが在籍する場合において留意することの1つとして教師が一般論として提示する聴覚障害のある子ども像と目の前の級友としての聴覚に障害のある子どもの現実の姿との「ギャップ」から生じる影響を取り上げている。すなわち、聴覚障害理解の授業を行うにあたっては、それぞれの聴覚障害のある子どものきこえ方、言葉の感じ方、受け止め方などは異なることが、聴覚障害の一般的な知識を考える際の大きな課題となることを指摘している。

それらに関しては、それぞれの研究協力者によって個々の聴覚障害のある子どもについての具体的な授業実践がなされた。

まず、授業の前にどのように自分のきこえ方、コミュニケーションについて話したらわかりやすいかなど、聴覚障害理解のための教材作りを聴覚障害のある子ども本人と一緒にやっていることが特筆される。これは、実際には紙芝居やことばの教室紹介ビデオという形でなされた。

次に、授業の中で実際に聴覚障害のある子ども本人が自分自身のきこえない（聴覚障害）ことについて話す、それに対して質問を受けて答えるといった形で実施された。さらには、難聴学級もしくはことばの教室を知ってもらうために、朝の会などを利用して行われる実践もみられた。

資料

QUESTIONNAIRE SURVEY ON SESSION FOR UNDERSTANDING HEARING HANDICAP IN ORDINARY PRIMARY SCHOOL

Masayuki D.S. SATO and Kazushige SHISHIDO

The National Institute of Special Education, JAPAN

ABSTRACT

The aim of this paper is to clarify details of a questionnaire conducted on teachers who provided sessions to promote understanding of hearing handicap among children. The results suggested that we should take into consideration how children with hearing handicap communicate and the concrete details of how they listen through their hearing aid in developing appropriate teaching materials for such sessions.

1. INTRODUCTION

In Japan, the resource room program represents a style of special educational service for children with hearing handicap enrolled in a mainstream ordinary primary or lower secondary school class. Children are withdrawn from ordinary class for resource room programs, according to the nature of their handicap. The number of these children is about 1200.

In recent time, the sessions to promote understanding of hearing handicap is often carried out in the class period for integrated study in ordinary primary school, because most of children with hearing handicap who are mainstreamed are the only child with hearing handicap in the ordinary class. Although teachers who manage the session to promote understanding on hearing handicap specialize in hearing handicap, they find it difficult to present knowledge on individually different hearing handicap each child possesses(Reese,1998,Lynas,1997).

In addition, hearing peers in ordinary classes have difficulty communicating with the mainstreamed children with hearing handicap. Then, it might be thought as ground_ that we have difficulty explaining the feature of hearing handicap (e.g. hearing handicap is not apparent) and teachers who carry out the session to promote understanding on hearing handicap cannot experience the actual listening experience of a hearing handicap child(Cambra,1997).

The aim of this paper is to clarify details of questionnaire survey conducted on teachers concerning sessions to promote for understanding on hearing handicap.

2.PROCEDURE

The questionnaire survey was divided into the following sections;

That is,

- 1) Topics which are taken up in the session to promote understanding on hearing handicap
- 2) Materials which are insufficient in such sessions
- 3) Difficulties in the session for understanding hearing handicap
- 4) Requests concerning the development of teaching materials
- 5) The understanding of individual hearing handicap

The subject of this questionnaire were teachers of school for the deaf, special units for hearing handicap in ordinary primary school with experience in session to promote understanding of hearing handicap in a class of ordinary primary school . 48 teachers returned the questionnaire with answers.

Each question was answered by free description and subjects were permitted to make plural answers on each question. The percentage of different answers to each question was calculated with the number of subjects (n=48) as its population.

3.RESULT AND DISCUSSION

3.1. Topics which are taken up in session to promote understanding of hearing handicap

On topics which are taken up in session for understanding hearing handicap it was indicated that the percentage on communication of children with hearing handicap was 90%, their listening 85%,hearing aid ,cochlear implant and assistive listening devices 56%, their education 29%, their life 23% and others 8%.

3.2. Materials which are insufficient in session to promote understanding on hearing handicap

As shown in Table 1, the material on listening of children with hearing handicap showed the highest percentage.. That is, it was shown that materials which present adequately on listening of children with hearing handicap, because children with hearing handicap carry various personal conditions. The material on hearing aid and cochlear implant with a percentage of 35% was in the second place. Then, it is thought that the material which is explained on specific effect of hearing aid and cochlear implant are insufficient on session for promoting understanding in hearing handicap.

The communication with children with hearing handicap with a percentage of 16% was in the third place. Teachers find difficulties in explaining the communication with the children with hearing handicap.

The percentage for trouble in daily life was 10%, psychological problem 8%, education for children with hearing handicap 8%, trouble which is based on misunderstanding with hearing handicap 4%, interaction with them 4%, language development 4% and others 27%.

Table 1 Materials which are insufficient on session to promote understanding on hearing handicap

<i>Material</i>	<i>Percentage</i>
Listening	50%
Hearing aid and Cochlear Implant	35%
Communication	16%
Trouble in daily life	10%
Psychological problem	8%
Education	8%
Trouble(misunderstanding)	4%
Interaction	4%
Language development	4%
Others	27%

3.3 Difficulties on session for understanding hearing handicap

As shown in Table 2, the difficulty of explaining the listening of children with hearing handicap showed the highest percentage of 44%. The answers included not only difficulties on the explanation on listening, but also on explanation on listening in various scenes, so-called “hard to listen” and “not listen to all”. It is suggested that teachers (subjects) are difficult to explain, because they can not actually experience “to listen” or “hard to listen” on children with hard of hearing.

Difficulty of explanation on the communication with children with hearing handicap showed a percentage of 35% was second to the highest.

Other answers included psychological problems which was 15% , lack of accessibility 13%, gap of comprehension depending on age 8%, compassion to children with hearing handicap 8%, equality 4% and others 29% .

Table 2 Difficulty on session for understanding hearing handicap

<i>Difficulty item</i>	<i>Percentage</i>
Listening	44%
Communication	35%
Psychological problem	15%
Lack of accessibility	13%
Gap of comprehension	8%
Compassion	8%
Equality	4%
Others	29%

3.4 Requests concerning the development of teaching materials

As shown in Table 3, requests on the demonstration video tape on the listening of children with hearing handicap held the highest percentage at 44%. That is, this result is reflected in the results on question 2 indicating the insufficiency of material on listening and question 3 indicating teachers` (subjects) difficulty in explaining the listening of children with hearing handicap.

The request concerning the development of teaching materials on communication with children with hearing handicap had a percentage of 29% which was second to the highest. And, case on trouble with communication have a percentage of 8% was in

third place. Then, it is suggested that subjects request the material for hearing peers which aim to discuss on the regard to children with hearing handicap.

In addition, hearing aid and cochlear implant was 6%, manual on session to promote understanding on hearing handicap 4%, works of children with hearing handicap 4%, and others 21%.

Table 3 Requests concerning the development of teaching materials

<i>Teaching Material</i>	<i>Percentage</i>
Demonstration tape on listening	44%
Communication	29%
Case of trouble	8%
Hearing aid and cochlear implant	6%
Manual on session	4%
Works of children with hearing handicap	4%
Others	21%

3.5 The individual understanding hearing handicap

As shown in Table 4, answers concerning communication held the highest percentage of 52%. It is suggested that teachers (subjects) explain on communication methods which are suitable for each children with hearing handicap and take the discussion how to communicate with them who are enrolled in class.

The answer that children with hearing handicap was involved in the construction of session had a percentage of 23% which was second to the highest. That is, the child with hearing handicap who is enrolled in ordinary class talk about himself(herself) in order to promote understanding among his/her peers.

In addition, regard to children with hearing handicap was 21%, understanding listening of children with hearing handicap 17%, support for accessibility 13%, hearing aid 10%, comprehension language 6%, and others 13%.

Table 4 The individual understanding hearing handicap

<i>Answer</i>	<i>Percentage</i>
Communication	52%
Construction of session	23%
Regard to children with hearing handicap	21%
Understanding listening	17%
Individual children with hearing handicap	13%
Support for accessibility	10%
Hearing aid	6%
Comprehension language	6%
Others	13%

4. CONCLUSION

The aim of this study was to analyze the details of the answers to a questionnaire survey conducted to teachers on sessions to promote understanding on hearing handicap.

The main findings were as follows:

1. It is difficult to present knowledge on hearing(listening) and communication concerning hearing handicap with appropriate terms, because children with hearing handicap carry various personal conditions .
2. On the understanding of individually different hearing handicap, it shows how hearing children should communicate with children with hearing handicap on individual cases and that children with hearing handicap participate on the construction of sessions to promote understanding on hearing handicap.

These findings suggest that we should take into consideration how children with hearing handicap communicate and the concrete details of how they listen through their hearing aid in developing appropriate teaching materials for such sessions .

REFERENCES

- Cambra,C (1997) The attitude of hearing students towards the integration of deaf students in the classroom. *Deafness and Education* ,21,2, 21-25.
- Furnham ,A. and Lane,S.(1984) Actual and perceived attitudes towards deafness. *Psychological Medicine*,14,417-423.
- Lynas,W., Lewis,W., and Hopwood,V.(1997) Supporting the education of deaf children in mainstream schools. *Deafness and Education*,21,2,41-45.
- Monkman,H. and Baskind,S.(1998)Are assistants effectively supporting hearing-impaired children in mainstream schools? *Deafness and Education*, 22,1,15-22.
- Reese,A.(1995)Hearing teachers and their hearing impaired Pupils : A study of the views of mainstream primary teachers before and after teaching hearing impaired pupils. *Journal of British Association Teacher of the deaf*, 19,1,1-6.

研究協力者・研究協力機関一覧

研究所スタッフ（研究分担者）

穴戸 和成（聴覚・言語障害教育研究部長）

佐藤 正幸（聴覚・言語障害教育研究部 難聴教育研究室長）

研究協力者

菅井 邦明（東北大学教育学部）

鷺尾 純一（筑波大学心身障害学系）

中瀬 浩一（大阪市立聾学校）

大崎 美保（京都市立九条弘道小学校）

宮内まり子（鹿児島県曽於郡志布志町立香月小学校）

田嶋恵美子（東京都世田谷区立駒沢小学校（平成 12 年度））

（東京都世田谷区立久品仏小学校（平成 13～14 年度））

田原 佳子（千葉市立院内小学校（平成 13 年度））

（筑波大学附属聾学校（平成 14 年度））

研究協力機関

東京都世田谷区立駒沢小学校（平成 12 年度）

京都市立九条弘道小学校（平成 13～14 年度）

千葉市立院内小学校（平成 13 年度）

一般研究報告書

聴覚障害理解のための教材開発とそれを活用した授業

平成 15 年 3 月

独立行政法人国立特殊教育総合研究所

聴覚・言語障害教育研究部

難聴教育研究室

〒239-0841 神奈川県横須賀市野比 5-1-1

TEL:046-848-4121

FAX:046-849-5563

<http://www.nise.go.jp>